



永井荷風著



別く-2

次 目

の
祝 春 深 曇 狐 花 牡 監 歡
の お 川 天 花 丹 獄 署
と と 川 の 天 花 丹 の 署
づ づ 川 の 天 花 丹 の 署
れ れ 川 の 天 花 丹 の 署
盃 盃 川 の 天 花 丹 の 署 裏 樂

歡
樂

短篇小説集歡樂は千九百八年七月
外國より歸りて後一年間の創作を
集む。千九百九年九月 永井荷風



人は幾度も戀する事が出来るだらうか。唯た一度しか出来ない、
女性は必ず云ひ張るに違ひない。男でも古臭いロマンチックな夢から覺め
ないものは、矢張り同じやうな事を云ふかも知れない。誰でも戀に熱して

る最中には、それが生涯の戀の最終であるらしく感ずるのは當然の事で
もし其の戀に成功してしまつた後、一生涯それ以上の熱烈な感激を覺えず
にしまつたなら、我輩はさう云ふ人達を幸福だと羨むばかりで、その人の
實驗から得た斷定を否定しやうとは思はない。つまり、運命が其の人には

樂 歡

さう云ふ戀の斷定をさせるやうに、さう云ふ戀の經驗を與へたのだから。その代り、我輩も自分の經驗から得た自分の斷定を、他人の經驗一圖で否定して貰ひたくない。二十世紀は紛亂の時代だ。經驗から自個が感じたものより外に眞理はない。君達は富豪の兒に向つて、あなたは盗みをしなかつたから一代の道徳家であると褒める必要を認めない。只だ富豪の兒は盗みする程貧しくなかつた、盗みする必要にも機會にも出會はなかつたと云ふ事實を認識して、單純に幸福な人だと思へば充分であらう。我輩は一度しか戀しなかつた人を、單純に幸福だと云ふばかりだ。

こんな議論を聞きながら、四月も末の晴れた晝過ぎ、私は文壇の先輩なる小説の大家〇〇〇氏と日比谷公園の若葉の小道を散歩した。年頃はもう四十歳を越して、學者や詩人にのみ見らるべき、思想生活の成熟期を示

す沈痛な面の表情が、うつとりして疲れたやうな眼の色に和げられて、云ふに言はれず優しく又懐しく見える。血色のよい額にはまだ皺一ツなく其の上に長く垂らした髪の毛は眞黒であるが、風の度びく木の葉を漏れる強い日光に照らされて、其の濃い口髭の中には、早や數へられぬほどの白髪が、銀の糸の如く目立つて輝く。私は日頃から懸念にしてゐながら、この瞬間までは、少しもその髭の白さには氣がつかかなかつたので、久しく幽婉な筆致と熱烈な情緒を以て、吾々の若い血を躍らせた文壇の大家も、已にこのやうな老いたる人であつたのかと、私は突然一種の悲哀と不安を覚えて、何とはなしに其の顔を眺めながら、訊くともなく、
「先生、それぢや先生は今日までに何度ほど戀を経験されたんです。」と訊いて見た。

先生は極めて沈着いた調子で、「丁度十年前——今年四十二だから、丁度三十二の時の事件が、僕の生涯には三度目の戀だった。今から考へると、あの出来事が僕の青春の歴史の末段を告げたもので、其の以後は其の以前とは全く色調を異にした時代が始つた。僕は十代、二十代、三十代とつまり三度戀した。三度目が僕の生涯の最終の戀であつたと思ふ。」

「然し、先生。さう一概に断定してしまふ事は出来ません。更に新しい何物かに打たれるまでは、いつも最終らしく感じられるのが戀の常でせう。先生もさう云はれたぢやないですか。」

「それアさう云つた。斷言する事は無論出来ないが、まア君、君の眼が見る現實の僕を觀察し給へ。もう年が年だ。僕はあの當時、猛烈な戀に捕はれて居る最中にも、これが最後だ、青春の最後の夢だぞと云ふ氣がして、

未來の憂慮なく、甘い瞬間の夢にはかり酔ひ盡した廿歳の戀とは、全く様子子の違ふ處があつた。三十歳にして已にさうだ、四十歳の今日ではもう戀愛の恍惚は事實に於て不可能だ。如何なる強い夢も老年と云ふ『時間』の重さには敵しないさ。フランソワ・ロッセーの『涙』と云ふ悲惨な詩を知つてゐるかね。」

J'aurai cinquante ans tout à l'heure ;

Je m'y résigne, Dieu merci !

Mais j'ai ce très grave souci :

Plus je vieillis, et moins je pleure.

.....

Oh ! les cheveux blancs et les rides !

Je les accepte, j'y consens ;

Mais au moins, jusqu'en mes vieux ans,

Que mes yeux ne soient pas arides !

五十歳は近けり。

神よ、われは退かん。

されど如何にせん、われに堪へ難き憂あり。

そはわれ老ゆるに従つて、次第に泣かんとする事の稀れなるを

あゝ、髪かみの白しろきも、面おもての皺しわも、

われ甘あまじてそを受けん。

されどわが世よの最後そはりまで、

わが眼まなこのみ乾かはかしむるな。

原詩を朗讀する傍から、先生は私に分るやう、苦心して翻譯しながら、

遅い散歩の足をば猶更遅くさせて歩いて行つた。

迂曲する若葉の小道が盡きて、突然目の前に擴がる初夏の青空、強烈な

日の光。其の下に廣々した運動場が、乾いて白くなつた砂利交りの面を擴
げて居る。彼方此方に駆け廻つて、球を投げてゐる學生の姿が、日の輝き
と眺望の廣潤に對して、小さく黒く影の動いて居るやうに見える。突然一
個の球が流星の如く、遅々として歩いて來る吾々の足元に小砂利を轆つて
轉つて來た。それを捕へやうとして、制服の上衣を脱いでシャツ一ツにな
つた中學生が向う見ずに馳けて來て、危く先生に突當らうとして、驚いて
身をよげやうとした拍子に、中心を失つて激しく前へのめつた。普段は車
が衝突しても電車から人が落ちてても極めて冷淡に見向きもしない先生さへ
餘りに激しい轉び態に、覺えず、「あぶない」と叫んで、手づから扶起さう
とするらしく寄添つたが、元氣な學生は其れを待たず、直様起上つて球を
拾取るや否や、運動場の方へ馳けて行つてしまつた。

私は呆氣に取られて、其の後姿を見送つた。先生も同じく其の方を見送つて居たが、暫くして突然、

「アナトール、フランスの小品を思出す。」と云つた。「十月の初め、朝早く色付いた木の葉が眞白な石像の肩に一枚々々散りかゝるリュキザンブルグの公園を、雀のやうに飛びながら學校へ行く子供を見た時の感想……。成程凡ての物には何時までも、昔見た其時の魂が残つて居る。其の魂が人を悲しましめ又喜ばすのだ。私はあの活潑な少年の元氣を早くも十六の時に失してしまつた。文學ほど人を早熟させるものはあるまい。」

それなり又散歩して、歸り道の暮れ方に新橋の洋食屋で晩飯をすましたが、其の時酔ひと共に話し出す先生の回顧談に引かされて、私はとうとう芝の公園内に今もつて獨身の生活をつかけてゐる先生の寓居まで、我知ら

す附き従つて行つた。

先生は云ふ。そもく物心ついてから今日まで、私の生涯には戀愛と文藝と、この二ツより外には何物もなかつたと云つてよい。戀愛は無論、智識の力をかりず獨立して肉情から發生する事は云ふまでもない事であるが然し私にして若し、中學校の教科書として、ラムの沙翁物語や、アービングのスケッチブック（其の中の殊にブローケン、ハアトの如き）を読まず又暑中休暇や日曜日近松の淨瑠璃や徳川末代の戯作の閲覽に費さなかつたなら、私は確かにあんな感情の早熟を見はしなかつたらうと思ふ。私は

十六歳の時、腺病質の母から遺傳された瘰癧を根治する爲めに、大學の第二病院に入院して外科の手術を受けた事があるが、私は日夜病床に付添ふ看護婦に對して、此れまで父母の傍に生きてゐた時覺えた事のない感情を知り初めた。私は直ちに讀書から得た想像で、此の新奇な感情が戀と云ふものである事を意識すると、私は苦しいほどに嬉しく思つたと同時に、戀は必ず不幸で悲惨であるやうに書いてある讀書の経験から、云ふに云はれぬ悲愁に襲はれた。實際私には、此れから自分の経験しやうと云ふ戀の成行がどんなであるのか分りもせぬ先から、近松によればそれは身の破滅、死の導きであり、又シエーキスピーヤに従へば人生の運命の悲惨を示すものであるとしか思へなかつたので、萬一其れ等以外に、目出度し／＼の戀があるとするならば、其れは戀と名付くべきものではないと云ふやうな

断定が、何時となく原因なく、私の若い十六歳の胸の中に動しがたく形造られて居たのである。それ故私は幾夜も眠られなかつた程煩悶したに係らず、たう／＼其の看護婦に對しては、自分の心中を打明け得ずに退院してしまつた。打明けたなら必づ拒絶されるばかりでなく、私の付添ひを辭退して私の傍から去つてしまふであらう、それよりは寧ろ沈黙して、獨りで永久に、片思ひの涙に暮れた方かと思つたので。然し退院する間際には必死の思ひで寫真だけを貰ひ受け、家へ歸つて再び通學し初めたけれど、過ぎた昨日までの事を思返すと、戀しくて／＼どうかして最一度入院するやうな病氣になりたいと思ひ詰め、最早や普通の學生のやうに、學期試験の席順を争ふ野心も、運動會で勝利を博する元氣も無くなつてしまつた。私は學校の歸り道とか日曜日とか暇さへあれば、病院の塀外を歩き廻つ

て、植込みの梢越しに見える陰鬱な建物の、開かれた窓から、もしや其の人の顔を見る事もやと、其の思ひにばかり月日を送つてゐる中、私は其の年の秋、帝國大學の陸上運動會の雑沓する見物人の中で、見知つてゐる他の看護婦から私の戀してゐる人は、一ヶ月ほど前に郷里へ歸つて結婚した由を聞き傳へた。

私はその時不思議な程驚かなかつた。話された事件は、初めから斯くあるべく豫想してゐた通りになつたやう、如何にも自然であるらしく思はれた。思はれると忽ち私は、聞える軍樂隊の勇しい進行曲や、赤白と叫び狂ふ人の聲、ざり／＼照りつける暑い秋の日光が、一瞬間も我慢の出さぬ程に辛く思はれ、もつと静な、薄暗い、濕氣ある、冷い場所に身をかくしたく、運動場の岡の裏手、深い木立の底なる古池の方へと歩いて、私は物す

ごく沈静した溜り水をば黙つて眺めた。それから日の暮れると共に家へ歸つて、ランプをつけながら部屋へはいつたが、すると、今更のやうに新しく目につくのは、本箱の上に立てかけた彼の人の寫眞である。いつものやうに私の勉強する机の方を見詰めてゐる。私は幾度か小聲で其の名を呼んだばかりか、もう堪えられぬ心地がして、私はこれまでの悶え、歡び、悲しみのありたけを書き綴つて送らうと思ひ、すぐ其の瞬間から、私は翌日の課業も何も彼も放擲して、入院した當時の初對面の事から、出来るだけ精密に書きはじめ、其の夜は二時まで筆を取つた。

然し翌朝になると、あの人が讀んだらば立腹しはせまいかと、氣遣はれもするし、氣まりのわるい心地もする。又萬一夫の目にでも觸れて、あの人の幸福の障害にでもなつたら大變だと思ふと、性來臆病な私は、郵送し

やうかしまいかとの不決断にまたく以前にも増した煩悶の幾日を送る事になつた。其結果はやつと決心して、半紙十枚以上一氣呵成に書上げた手紙は、誰にも示さず埋没してしまふ事としたが、然し埋没しきれぬのは胸にやどる片戀の思ひで、私は其の冬の休暇中、何だか今では忘れて仕舞つたが、兎に角戀の惱みを描いた新刊小説を讀むと、自分も急にさう云ふ事が書いて見たく、書いたなら幾分か心の慰めになるだらうと思つて、私は秘つて置いた手紙を再讀し、自分を主人公にした短い小説を作つた。これがそも／＼私の小説の處女作である。

……肉の底に根を張つてゐない戀は、摘まれた花瓶の花に等しいと、何かの本で讀んだ事がある。如何なる純潔な戀でも、其れが充分に發育して行くにはどうしても實感の要素が無くてはならぬ。私は裸體の美術をも、從七位何々の肩書を頂戴してゐる美術學校の或る先生が『神聖』であると云ふが如き意味で、神聖視しては居ない。私は死したる裸體の畫面や彫刻に對して恍惚の美を感じる人ならば、必ず生きた女の裸體に對しても恍惚たり得ると思ふ。恍惚たらねばならぬと思ふ。薔薇の花の詩を吟ずる人が實物の薔薇を愛さぬと云ふ理由が何處にあらう。戀愛が古人の云ふ如く、神聖なるや否やは私の知らうとする處でない。私は唯だ、手も握らず煩ずりもしなかつた最初の戀よりも、其れから二年たつた十八の夏の夜、旅行した海邊の松原で、宿屋の娘と、初めて禁制の果實を摘んだ、其の紀念の

方が何れだけ深く忘れられなかつたか、其の事實だけを承認して貰へばよいのだ。一夜、二夜、三日目の夜には別れてしまつた其の夏の夜、夢よりも、また幾年かたつて、青春の廿二歳の折に遭遇した戀の方が、更に猶ほ何れだけ深く忘れられなかつた。

其の時分、明治の文壇は狭斜小説の全盛期であつた。藝術は貴族の宴席にのみ花を開いた十七八世紀の歐洲よりも、もつと長閑な時代であつた。作家は能ふかぎり美麗な文字をもて、女着の流行、帯の色模様を歌つたのみならず、日常の會話にも狭斜の通語を挿入して、ウイットの豊富を誇りとしたものも少くなかつた。私は已に其の時は大學の英文科にはいつてゐたので、一篇の著作に名聲を世に博したいと云ふ青春の野心止みがたく、矢張時勢の感化を免れずして屢々花柳の巷に出入したものだ。其の頃の觀

察や解剖は今から考へると生活のスタヂーではなくて、長閑な日永のアミューズメントだと云つてもよい。

場所を云ふ必要もなからう。名前を云ふ必要もなからう。どうして、どうなつたかを語る必要もなからう。兎に角、ある夜ある處である藝者が私を愛した、私の方からも愛したのだ。私は不品行の角を以て大學を退校されても、其の當時其れを後悔する暇さへ無かつた程熱中して居た。私は其の時始めて、私の身體と私の精神とが外界の刺戟に呼び起される快感に對して、何れ程の感受性を持つて居るかを確めた。月の光も雨の音も、戀してこそ始めて新しい色と響を生ずる。料理屋の夜更けに遠くの座敷で弾く三絃の音は、封建時代の血なまぐさい戀の末路を目に見る如く描き出させる。海に添ふ避暑地の月の夜に、其れともなく聞えるピアノの調は、直に

自分をしてキーツやハイネの詩の生命に觸れさせるやうに思はせた。花の句ひ。音樂の響。屏風が包む燈火の色。化粧品と汗とが混する女の句ひ。崩れて落ちかゝる搖の形。指環の光、爪の輝き、友禪の染模様。かゝる凡ての形と色と音と匂ひの刺戟に打たれて、或時は却て其れから逃れ出やうと急る程な、感覺の快味に、全く『我』を忘却してしまふ無限の恍惚——私は實に、戀それよりも、戀せざる限りには知る事の出来ない此の恍惚麗醉の跡を追求したので、いか程女に愛されても女を愛しても、私は家庭の幸福、子孫の繁榮等に思ひ及ぼす事はどうしても出来なかつた。戀は青春のみが知る歡樂である。歡樂は美しい美しい夢である。私には、此の美しい夢に、(折角美しいものに)何等かの目的を負はせるには忍びないやうな氣がしてならなかつたのだ。『結婚は戀の墳墓なり』と云ふ格言が此の際と

れ程強く私の心に響いたのであらう。結婚は『一個の生物の醜惡なる生存』だとモーパッサンの云つた程、私は反感を抱いてゐなかつたけれど、然し私の周圍、親類や知人の調無味なる家庭のさまは、已に二十歳の私をして人類の生存に對して根柢ある厭世悲哀の感念を抱かしむるに充分であつた。學校は退校される、父母からは信用を失ふ、友人からは擯斥される、而して日本を形造る古今の道德宗教とは全く一致しない美しい『形』と美しい『夢』より外に私の身を慰めるものはない——かゝる私の身には、結婚とは何であらう、家庭とは何であらう、子孫とは何であらうか、殆ど光明ある解釋を施す事が出来なかつた。退校の當時、母は「世間に顔出しが出来ない」と泣き、父は「親の顔に泥を塗る」と怒つたが、私の懷疑主義は私をして、子孫は父母の虛榮心の玩具であるのかと驚かせたばかりである。私

の愛する藝者は或る夜私に向つて、思はぬ人に落籍されねばならぬ。私と一緒に逃亡して呉れるか、死んでくれるかと迫つた。

悲哀は美しいものである。悲哀ほど強い誘惑を持つてゐるものはあるまい。私は直ちに死なうと約束した。私の心は数知れぬ美しい幻影に満たされた。船頭が篝火を焚きながら夜網を打つてゐる水の上に、寺の鐘がゴーンと響いてくる暗い景色や、或は野薔薇の花が星のやうに咲く古城の壁に月の光が蒼くさまよふ夜のさまなど、近松、黙阿彌、ボツカチオ、シェーキスビーヤなど此れまでに心を打つた詩中の光景が、ごたくくに混雜して浮んで來るのであつた。私な白晝でも眼さへ閉れば、梅川や、忠兵衛や、おこよや、源三郎や、ロメオや、ジュリエットや、パツロや、フランチェスカや、其れ等の若い人々の美しい容貌、亂れる髪、顔へる唇をありく見

る事が出來、其れ等の人の云ふ言葉、「なむあみだぶつ」や、Pardonnez-nous, Seigneur (主よ許させ給へ)の聲を聞くやうに思つた。さう云ふ瞬間には、私は昨日まで女の肌の暖み、柔い絹の衣服の手觸りに酔つたと同じやう、それよりももつと深い、言語に絶した悲哀美に恍惚として、現實の自分を全く忘却して仕舞ふのであつた。で、ふいと驚いて我に返ると、今度は猛然として、私は此の感激、此の恍惚の凡てを私の力かぎり歌つて見たい願望の、押へやうとしても押へられぬ餘儀無さを感じる。藝術の野心と云うか、現世の執着と云はうか。或は單純なる人間の本能と云はうか、兎に角、私は死ぬ前に、實在から消え滅びて仕舞ふ其の前に、自分の影を留めた何物かを残したい、其れだけの望みに驅られて、私は飄然として足の向いたまゝ、大宮公園の旅館に赴き、非常な熱情を以て筆を取り始めた。

五日ほどして、私は『行春の名残』と題した自叙傳とも云ふべき一篇を懷中にして、若し此れを發表するならば私の死後明治の文壇は如何なる驚嘆の聲を發するであらう、散る花は哀れであつて、再び返らぬものは皆懐しい。世間は私の才を惜しむであらう、惜しむにちがひないと、又もや此様空想に酔ひながら、私は大宮の松林を出て、間もなく汽車で上野の停車場についたのであるが、丁度晴れた秋の夕暮、本郷の家路へと、不忍池のほとりを歩いて行く時、私は一步步に、現在の私はもう一瞬間以前の私でない事を感じるのであつた。本郷の高臺にすさまじく燃え立つ夕陽の輝き、其れが静り返つた池の水に反映する美しい色彩、散歩する人々の歩調話し聲、車の往來、鳥の啼く聲、蓮の葉の戦ぎ、柳の姿——目に入る凡てのものは、私の胸一ぱいに、抑へ切れない生活の興味、生存の力を感ぜ

せるのであつた。約束を守り義理を思ふに、私の心はあまりに放縱であつた。晴れた秋の日光はあまりに美しかつた。私は情死の違約をどうして辯解すべきか、差詰めの方法に窮した結果、身の所在を戀人の手前から隠して仕舞ふより仕様がなれと思つた。

私は遠く支那沿岸の殖民地で營業してゐる叔父の店までたよつて行つたが、其のまゝ其處で、叔父の勸めるまゝに賃易地の商業界に身を置くことになつた。私は戀にもつかれ、詩作にも稍々飽きがきたからで。すると、大學を中途に退學された身も、このまゝ二三年辛棒するならば、將來は滞りなくどうにか世を渡り得やうと、故郷の父母までが、喜びの手紙を書いて呉れたが、併し一年二年とたつ中に、私は次第々々に詩人の生活の慕しさを思返した。此れまで送つた私の過去が、果して眞正の詩人の生活であ

つたか否かは知らない。然し兎に角、社會の何物にも捉れず、花さけば其の下に息ひ、月よければ夜を徹して、水の流れと共に河岸を歩む。此の自由、此の放浪は富にも名譽にも何物にも換へがたいではないか。顧れば私の周圍には、交際だの、友誼だの、政略だの、秩序だの、階級だの、あらゆる文明の偽善が取巻いてゐる。其れに反して、揚子江の水はいかに自由に流れて行くであらう。城外の平野はいかに限りなく廣がつて居るであらう。青空は商店の硝子窓からも輝く。白い雲は波止場の彼方に動いてゐる。私の慰藉はわずかに業務の餘暇を覗ぶ讀書であつた。ポケットに詩集なくして私は生る事が出来なかつた。私の思ふところ、悲しむところ、よるこぶところを、巧みに又自由に歌つてゐる詩を讀むと、私は百年の知己を得たやうな氣がするのであつた。私の讀書は研究ではない。勉強ではな

い。娛樂である。慰藉である。戀人の呷きであつた……

四

詩人に向つて詩の何たるかを質問する程、愚な事誤れる事はなからう。どう云ふ前提動機理由約束を以て戀したかを明瞭に語り得る戀人が何處にあらう。もし語り得たとせば、それは僅かに戀から覺めた後の回想に過ぎない。私は詩を讀んで感動したばかりだ。この感動、これ乃ち詩人の生命の全部ではないか、目的もない、計畫もない、私はたゞ私の眼が見て、心が感じる人生自然の凡てを歌ひたい、この熱情、この欲望より外には何にもない……

突然、其の迷つて来た時のやうに又突然、叔父の家を去つて私は東京に歸つて来た。私は最早や親の忠告を顧みなかつた。私は下宿住ひの孤獨を喜んだ。私は私の著作の世に歡迎されるのを見て無上の幸福を感じた。モ「パッサンも『巴里の人の日曜日』に、藝術家に對する最上の挨拶は唯だ賞讃の一語だと云つて居る。賞讃、實にこれほど麗しいものはない。枯れた草の葉も露に逢へば生き返る。神も其の光榮を歌ふものを呪はなかつた。戀も事業も藝術も、あらゆる美德も、つまりは此の麗しい聲を聞かぬが爲めに生きてゐる。私はこの聲の爲めにはいかなる犠牲をも厭はないと思つた。よき詩を作るには寂寞を愛さねばならぬ。血縁の繋累、社會の制裁から隔離せねばならぬ。彷徨はねばならぬ。讀まねばならぬ。泣かねばならぬ。醉はねばならぬ。喜ばなければならぬ——私は乃ち父母親戚の目から

は言語同断の無頼漢になつた。私は長雨の夕暮を、遊廓に近い場末の居酒屋に、わざ／＼晩飯を食ひに行つた事もある。淺草の觀音堂の階段に夜明をした事もある。木賃宿の行燈に夜半驚いて虱をさぐり、館酒屋の曉を人に襲はれ、裏露地を潜つて逃れ去つた事もある。雪の夜更け、待合からの歸り道に、老車夫が身の上話を聞いた。夏の午過ぎを大河端に釣する隠居様と話をした。渡し場の船頭と友達になつた。箱屋と並んで歩いた。妓夫と口論をもして見た。演舌も聞く、芝居にも行く、教會にも行く、夜學の語學校にも通つた。或る人はこれ閑人の好奇心に過ぎないと云ふかも知れない。眞に涙あるものゝ爲すに忍びない人生の傍觀者だと憤慨するかも知れない。然しそんな人は、私を非難する前に、罪惡の解剖のみに全力を盡くした自然派の作家や、全希臘式なる耽美をのみ喜ぶ、象徴一派の詩人

の名を、近代文學史から抹殺すべく努力するが、否それよりか、其の土地と財産を遂に捨てなかつたトルストイにでも矢を放つが、私には唯だ「形」を愛する美術家として生きたいのだ。私の眼には善も悪もない。私は世のあらゆる動くもの、匂ふもの、色あるもの、響くもの、對して、無限の感動を覚え、無限の快樂を以て其れ等を歌つて居たいのだ。何たる麗しい長い／＼燈火の夜であつたらう。私の廿歳は殆ど記憶する暇もなく、過ぎ行く夜毎の戀のさまざま、悶へ悩む暇もなく書き捨てる歌屑に、夢よりもたより無く明けてしまつた。明けた夜の曉にふと聞いて驚いたのは、あの緻粘れた鶏の聲より猶ほ味のない『三十歳』と云ふ聲である。夏の末の日盛り、緑のまゝながら、ひらりと落ちた木の葉の聞えない響である。

五

清朝の詩人王漁洋の詩に、十日雨、糸風片裏。濃春烟景似殘秋。と云ふ句がある。物に感じやすい人は必ず經驗して居やう。花もまだ散らない春の盛りに、どうかすると雨にもならず曇つたまゝに暮れて行く黄昏の、疲れたやうな静けさと、何か誘ひ出すやうな肌寒さとは、ふいと彼の悲しい秋の暮であるやうな感じをさせる事がある。丁度其れと同じやう、三十歳は男のさかり、その盛りを意識する強い傲慢な心の底に、ふいと感ずることもなく感ずる寂寥の想の、いかに悲しく、いかに氣味悪いであらう。初冬の凍つた明け朝なぞ、忽然冷えきつた鏡の面に、順顔の白髪を見出した時の

驚き、絶望、其れは事實に對する恐怖であるが、これは自分の心が生みだす空想の恐怖である。幻覺である。一度び理由なく目の前に浮んだとなつたら、如何にするも消すことの出来ない恐しい幻覺である。たつた二三年前までは、「白髮花前又十年」などと云つて、殊に支那の詩人が喜んで歌つた老境に對しても、人には誰れでもデカダンの趣味があるもので、私は荒廢して宮庭の跡に月の光のさまよふ如き詩景を思ひ浮べる事も出来たが、いざ其れが目の前に迫つて來たかと思ふと、私はもう夜半の枕頭に時計の響を聞くに堪えない心地がする。白髮の生へぬ中、皺一つ寄らぬ中も一度、あの情死を約したやうな戀がして見たいと、つくづく思ひ初めた。肉を撈り心を刺す此の一念は、世間から云へば分別盛りの年齢の私をして十九廿歳の青年よりも甚しく、到る處の艶しい小路々々を彷徨はせた。

何と云ふ狂亂であらう。然し、急せれば急せる程、私は最早やどうしても二十歳の時のやう、他愛なく夢見るやうに遊ぶ事は出来ならしく思はれた。生活に對する今日までの經驗が何事によらず直と物の眞底を見透して興味を削いでしまふし、其れと同時に、路傍に聞く新しい流行唄なども、私には時勢の變遷に従ふ趣味の低落を悲しましめるばかりで、私はあれ程喜んだ歡樂の巷に於て、却て他には感じられない寂寞に襲はれる場合が多かつた。私は死なうと云つた以前の戀人を思出す。今頃はどこに居る、何をして居るか、どうかして一度邂逅したい。何故私はあの時死なんかつたのであらう。藝術は果して戀よりも美しかつたであらうか。私は最も麗しいものとして情死を歌つた事は無かつたが、あゝ……。私は獨り寂しく去つて返らない過去を思返すより仕様があるまい、それが詩人の、否凡ての

人間の満足して受けねばならぬ運命であらう。私は嘗て戀人と手を取つて語つた公園の休茶屋、神社の境内を歩いて、私の瞬間の想ひを寫してゐる詩を讀むのが、再び何物にも換へがたい慰安となつた。あの當時、貿易商の事務室で、人目を忍んで讀んだ詩集の、『滅びざる形』、『美の女神』、『琴のさゝやき』、『永久の藝術』、『詩人の光榮』など云ふ文字が堪えられぬ程血を熱せしめたのに引換へて、今は、『思ひ出で』、『消る夢』、『残る薫り』と云つたやうな文字が、音樂となつて胸の底に浸み渡る……

六

この限りもない幽愁の秋の庭に、突然美しい小鳥が何處からともなく飛

んで來た。そして美しい聲で囀つた。それはいつも行き馴れた池の畔の待合で、ふいと或る日の夕方、私は人の妻かと思つて丸鬚に結つてゐる若い女に出會つた事である。窓の外には三月の曇つた空に風も吹き絶えて、濁つて沈んだ水の面に、岸に臨む人家の明い梅の花が、暗い上野の森の反映と共に、動かずに浮んでゐた。女は私の這入つて來るのを機會に歸りかけやうとする。それをば其の家の主婦が、「いゝんですよ。氣の置ける方ぢやないんですから。御ゆつくりなさいよ。」と云つたので、私は挨拶するなり主婦と一緒になつて、窓外の軒燈だけには已に灯のついて居る夕闇の座敷に、女中が臺付きのランプを持つて來る頃まで話し合つた。

丸鬚の女と云ふのは根岸に圍はれてゐる人の妾であると、歸つた後で主婦が話した。初對面の雑談中にも、「もう今年二十三、いやになつちまふわ

ねえ」と云ふわざとらしい嘆息を幾度も繰返して、私の顔を大膽に見ながら、「二十六か七、どうしても八には見えませんね。男の方は樂しみなねえ。」と云つたのが、其の時實にうれしく私の耳に響いた。小肥りの、意氣な身體付きではなかつたが、いかにも顔色のいゝ、暖かさうな女で、然し指環を澤山はめた手先は、夕闇の長火鉢の上に差懸される度々、いかにも白くしなやかに見えた。長くきちんと坐つて居る事が出来ないと思つて、話す語の終り毎に、恐しく透通つた聲で、高く遠慮なく笑ひながら、絶えず身體を揺り動しては坐住居を直して居た。何と云ふ華やかな笑ひ聲であらう、われ知らず満ち渡る胸一ぱいの歡びが、自分には心付かぬ中、あの美しい咽喉の奥を潜つて、あの眞白な齒の間から、泉の湧く如く吹出るとしか思はれぬ。何んと云ふ思はせ振りな坐り方であらう。それは、廿三歳と云へ

ば成熟しきつた女の身體の、丁度熟つた果物の枝に留り得ぬと同じく、あらゆる慾情を投げ掛けて凭れかゝるべき、強い力のある男の腕を求める其の悶えの爲めに違ひない。私は最初一目見た其時から、身の顫へる様な誘惑を感じたのだ。

丁度その刻限と同じやう、二三日過ぎた日暮れ方、折よくも二度目に出會つた時、私は到底我慢が出来ず、待合の主婦と一緒に、無理にとその女をば、近所の料理屋まで夕飯を食べに連れて行つた。

私は若い女連れと料理屋へ行く時ほど愉快を感じる事はない。塵一ツなく清められた上に軽く打水のしてある入口の敷石を踏鳴しながら、かう云ふ時にはいつも氣後れするらしく後になる女の手を取つて、ずつと玄關へ上ると、其處へ出迎へる大勢の女中。彼等女同士の鋭い眼は見つて見ぬやう

ねえ」と云ふわざとらしい嘆息を幾度も繰返して、私の顔を大膽に見ながら、「二十六か七、どうしても八には見えませんね。男の方は楽しみねえ。」と云つたのが、其の時實にうれしく私の耳に響いた。小肥りの、意氣な身體付きではなかつたが、いかにも顔色のいゝ、暖かさうな女で、然し指環を澤山はめた手先は、夕闇の長火鉢の上に差翳される度々、いかにも白くしなやかに見えた。長くきちんと坐つて居る事が出来ないと見えて、話す語の終り毎に、恐しく透通つた聲で、高く遠慮なく笑ひながら、絶えず身體を揺り動しては坐住居を直して居た。何と云ふ華やかな笑ひ聲であらう、われ知らず満ち渡る胸一ぱいの歡びが、自分には心付かぬ中、あの美しい咽喉の奥を潜つて、あの眞白な齒の間から、泉の湧く如く吹出るとしか思はれぬ。何んと云ふ思はせ振りな坐り方であらう。それは、廿三歳と云へ

ば成熟しきつた女の身體の、丁度熟つた果物の枝に留り得ぬと同じく、あらゆる慾情を投げ掛けて凭れかゝるべき、強い力のある男の腕を求める其の悶えの爲めに違ひない。私は最初一目見た其時から、身の顫へる様な誘惑を感じたのだ。

丁度その刻限と同じやう、二三日過ぎた日暮れ方、折よくも二度目に出會つた時、私は到底我慢が出来ず、待合の主婦と一緒に、無理にとその女をば、近所の料理屋まで夕飯を食へに連れて行つた。

私は若い女連れと料理屋へ行く時ほど愉快を感じる事はない。塵一ツなく清められた上に軽く打水のしてある入口の敷石を踏鳴しながら、かう云ふ時にはいつも氣後れするらしく後になる女の手を取つて、ずつと玄關へ上ると、其處へ出迎へる大勢の女中。彼等女同士の鋭い眼は見えて見ぬやう

に、私が連の女……女とよりは其の髪と衣服に注がれるであらう。それが迷つた男心には何よりも得意に、又譯もなく氣耻しい氣がして、必ず足早やに、鏡の如く拭込んである廊下をば案内されるまゝ座敷へはいる。と、疊が含む塵の匂ひかとも思ふ、普通の人家では決して感じない、一種の軽い濕つた匂がして、冷えた根岸塗の壁の色が淋しく、其の片隅の稍薄暗い床の間に、活花の花のみが、人待ち顔に咲いて居るであらう。私はつまり見知らぬ處へ來たと云ふ、この新しい、多少の不安を交へた奇異なる瞬間の感情を喜ぶので、一度びこの美妙な刺戟に心を呼び覺されると、其れからは如何なる些細な事までもが、皆活々とした力で私の興味を引き出す。取り留めのない女の談片が却て忘られない記憶を残す。其の夜は、庭を越えた向側の座敷で女を相手に頻と藤八拳をやつてゐる男の聲、例の如く聲色

使が裏通の處々に立留つては木を打つてゐたが、聞き馴れた其れ等の響がまだ更けもせぬ夜を、いかにも更けたらしく氣をいら立たしめた。あゝ捕へがたい確めがたい希望の夢に攪られ、現在はまだそれ程深く知り合はない若い女の、廻る盃の數と共に、自分に話す言葉使ひの角がとれ、見合す眼の色の次第々々に打ち解けて行く、其れを感じる心持こそ、戀の歡樂の最も甘い瞬間であらう。待合の主婦は私の心を疾うから見抜いてゐて、幾度か席を外した。其の時々、私は何かに事寄せては、手を觸れ合さうと試みた。

女は其の夜大分酔つてゐたに係はらず、主婦が座を立ちかけると、其れを止めやうともせず、然し私と差向ひになると、最初見た時とは別の人のやうに、きちんと坐つた形を崩さず、妙に話を途切らしてしまふ。ちつ

と見詰める私の眼の、烈しく燃え立つ慾望の光のまぶしさに堪えられぬと云ふやう、俯向いた顔を上り兼ねて居た。此の沈黙の中に進み行く時間は二人の運命を、二人の氣付かぬ中に、其の行くべき處まで行かしめねば止まないと言ふやう、恰も満ちて来る潮の流れの如く、ひし／＼二人の身に迫る。私は非常に高まる女の胸の響を聞き得るやうに思つた。其の響は、もうあなたに身を任してゐる、どうして下さるんです。と私の返事を促す哀訴のやうにも聞き取れる。あゝ、解き得ない謎、聞き分けられぬ呟き、定まらぬ色の動搖、形なき言葉の影——何たる悶えであらう。私は突然、この發表されない覺悟、聲ある如き女の沈黙は、もし此處に一步を進めるならば、窮鼠却て猫を噛む恐しい防禦の暗示でありはせぬかとも思つた。私は實にこの場合、虚心平然として何等の先入的專斷に捉はれる事なく、

相手の心理を洞察せねばならぬと思つた。自分ながら大分酔つてゐる事が分る。どうかして酔をすつかり醒してしまひたい。少くとも此れ以上酔つてはならぬと急つた。すると急れば急るほど、私は酔の廻るを覺え、眼がぐらくして、身體全體が次第々々に他人のものであるやうな心持がして……遂に意識が失つた、判断が消えてしまつた。目の前の女は乃ち女である。何等の社會的關係もない、束縛もない。目の前の女は唯だ單に、私が慾望の對照物として忽然現れ出たものとしか見えなくなつた。酒よ、汝に謝す……

其の年の春はまるで、私達二人の戀ばかりを祝ふ爲めに來たものとしか
 思はれなかつた。梅が散つて、いつも櫻の花時には、兎角に雨の氣遣はれ
 るのが、其の年には四月の月中にたつた二三度、それも花を汚す塵を洗ふ
 爲めにと、わざ／＼夜更けから降出して曉には屹度止んで呉れるやうな、
 情深い雨であつた。晴れ渡る空は日毎に青く澄む色の深さを増し、照りつ
 づく日の光は、咲きそろふ花の色と萌出る若草の緑を一層あざやかに引立
 せる。氣候は一時に驚くほど暑くなつて、午過ぎの往來には日傘を持たぬ
 通行の人が、早くも伸びて夏らしく翻へる柳の葉を眺め、人家の影の片側
 へと自然に足を引寄せられる。さう云ふ暑い日の風も吹かずに暮れてしま
 ふと、濁つたやうに色付いた黄昏の空氣は、其まゝに重く沈滞して人の呼
 吸を壓迫し、其處此處に咲くさまざまの花の薫りと草の葉の匂ひは、濕つ

た土や溝の臭氣までを混じ合せて、濕地熱にでも感染したやうな頭痛を覺
 えさせるので、其の不快不安な感覺から身を脱するには若い男が、あゝど
 うしても女だと、我を忘れて苦惱の叫びを放つやうな、妖艶極りなき春の
 夜が來るのである。私はかゝる夜を幾度び、恣に彼の女と手を取り、重
 たげに蔽ひ冠さる櫻の花の下を歩いたであらう。
 いつも上野の森陰や根岸の垣根道に時間を定めて忍び會ひ、其れからは
 足の向くまゝ、氣の行くまゝ、遠く向島のはづれまで走つて、もう蛙の鳴い
 てる水中の温泉宿に泊る。入浴した後の身の暖さに堪えやらず、又は閉
 めきつた小座敷の息苦しさに、そつと夜更けの小窓を明けて見ると、低く
 烟りわたる空の其處此處に、ぼつり／＼と浮いてゐる星は、形の恐しく大
 きいばかりで、にちんだ色のやうに光がない。明日は歸れまい、明日は雨

かも知れないと意味深く顔を見合して、其れなりぐつすり寢込んでしまふと、やがて曉方から突然變る氣候の寒さを感じてふと目を覺す。夜更け過ぎの飲食に胃の不健全が手傳つて、何か知ら覺めた後には思ひ出せない夢を、戀人の手枕に見て驚くのもこんな場合が多い。すると、夜はもうすっかり明けてゐるが、日は照らず、と云つて雨にもならず、永い晝過ぎは夕方方のやうに薄暗く、穩かに曇つて、鳥の聲にも力がなく、花は無心に散りかけ、池や水田や水溜りの沈んだ水の面に、浮き雲の動く影が、動かない木立と花の反映に溶け込んで行く、夢のやうな靜な日の幾日かつく事もあつた。

柔い絹の薄綿の寢衣にふところ手をして私は縁の柱や小窓に身を倚せて樹の枝振り、花の色、水の面、薄雲りの空の光を、倦み疲れた重い心持で

眺めて居ると、折々私は自分の傍に女がある、其の女が私の感覺を揺る美妙な刺戟の主である當然の事實をも忘れてしまつて戀とか愛とか呼ぶものよりも、一層深く廣くて、又不確定な限られない自由なる空想に溺れてしまふ。詩人が殊更あこがれる恍惚の仙境であつて、さうなるともう女は女でない。肉は肉でない。道德の否定した其の範圍外の世界が、美と調和に満ちて開展される。接吻の響も、抱擁の激しい呼吸の響も、混沌として酔へる自然の音樂と合致してしまふ。『時間』の進みは全く私の意識から消え失せて、瞬間は即ち永遠に通ずる思ひになる。然し突然、此の感激の頂上無我の天國から、再び私を現實の地上に突落すものは、車の音でも、汽笛の響でも、人の足音でも、犬の聲でも、風の戦ぎでもない。其れは私の心を酔して呉れた其の女自らであるのだ。よくモーパッサンの話を引くやう

だが、私は女に對する男の絶望、嫌惡の情を、あれほど深刻に感じた人はないと思ふ。「溺死人の手紙」と云ふ短編にも私の感想とよく似寄つた事が書いてある。理想を喜ぶ若い男が、夏の一夜をある女と、小舟に明した曉方に、自分の方を見返つては頻り微笑む女の様子の美しさ氣高さの、さては目覺める自然の美に打たれ、愛の心をも解して呉れたのかと思へば、何たる滑稽ぞ、女は男の髪の毛に這ふ毛虫を見て笑つてゐたのであつた……愛する事は憎む事を知る初めである。私がいつも愛する人の肩に凭れて、恍惚として無限に遊ぶ其の刹那に、女は必ず、「鳥が糞をした。」「あら、蛙が飛んだ。」「百姓がすべつた。」とか云つて、びつくりするやうな笑ひ聲を發しては、人の心と自然とが交通する折角の調和を破つてしまふ。

私はいつそ以前のやうに、遺瀨のない孤獨の思ひを詩に托しつゝ淋しく

歩いてゐた方が、誰にも美妙の空想に妨げられる恐れがなくて幸福であつたと思返す事もあつた。又は今夜の何時、何處其處で待つて居てくれとのランデブー會合にも、私は唯だ逢ふと云ふ望みを前にしたいだけで、却て空しく、待ち明かす恨みの方が、より深い記憶を残すであらうと思ふ事さへあつた。いや、密會の眞味は、つまり待つ間の悶え、苦しみ、心つかひ、其れだけに盡きてゐるのだ。

櫻の花は疾うに散つてしまつた。桃の花も散つた。山吹も散つた。藤の花も色が褪せてしまつた。最う牡丹を見に行く人もない。若葉の柔い緑の

色は、日毎に黒く濃くなり過ぎて、見馴れぬ眼には早くも疲れを覚えさせる。雨が降り出した。また梅雨の時期にはならないが、昨日も今日も、いつ晴れるとも知らず降りつゞく雨は、已に袷からセルの單衣を着た氣早い人の肩に羽織を着せかけ、久しく冷えたまゝの火鉢の灰に再び炭火をつがせるやうな、薄寒い濕つた氣候を呼び返す。春は成程歸ることなく去つてしまつたのだ。思出すと、驚くほど美しかつたあの春は、梅櫻から若葉まで、あまりに烈しい無数の色彩の變轉に、宛ら夜と共に消えて了ふ夕炎の雲の光に眼を射られたやう、私の心は唯だ無暗に強烈な色彩な幻影ばかりに滿されて、其の他の事件感想の凡ては却て智識が非常に朦朧としてゐた。昨日の過去は、丁度十年前も前に何處かで展げて見た繪卷物の、其處に描かれた人物は泣いてゐたのか戰つてゐたのか忘れてしまつて、唯だ濃く塗り

付けられた繪具の色ばかり記憶してゐるやうな氣がするのであつた。雨の音、雨の音。私は其の頃、墓地と寺とに近く重に美術學生の泊つてゐる谷中の素人下宿屋に住つて居た。雨の音。雨の音。夜は實に靜であつた。ランプの火は緑地の羅紗を敷いた机の上に、穩な光を投げてゐる。愛讀の書物の金文字がきら／＼輝く。野に積つた雪のやう、平に皺一つない幾帖かの原稿紙の面に、小さな唐獅子の文鎮が鮮な影を描いてゐる。硯の黒い四角なほとりに、二三本の優しい筆が、細く黄い竹の軸と、まだ汚れない白い毛の先を不揃ひに並べてゐる。燈火の赤い色が其のまゝ反映するかと思ふ滑な陶器の水入には、何時さしたのか、紫色した西洋の草花がもう萎れてゐた。私は片腕ついて、片手を懷中にして、ぼんやり絶えざる雨の音を聴いた。近いものよりは却て遠い昔の記憶が、軒に滴る雨だれの如

四八
 く、とぎれ〜に浮んで来る。私はよく子供の時分に、大雨の晴れた午後
 四手綱を持つて、場末の町の小流れに小魚を漁つた事がある。私は繁華な
 町を貫く堀割の橋の上を、雨の夕暮に、澁色や紺色や、さまざまの蛇の目
 傘が、圓く太い妙な書態で、料理屋待合などの屋號を書いた番傘と重り合
 つて、風にゆられながら過ぎ行く景色を、好んで眺めた事がある。支那の
 殖民地に行く時、港々の夜は恐しいまで廣くして暗く、遠い陸地の方から
 は、さう云ふ船着きの町にのみ聞かれる悲しい喧しい絃歌の聲が、とぎれ
 〜に流れて来るばかり。降りつゝ雨は、碇泊船の燈火の長く漂ふ滑
 な潮の上に落ちて行く、其の音も響もない雨の絲を、船窓の灯に眺めて泣
 いた事がある……。さまざまに浮び出でた過去の感想は、溜り水の面に反
 映する空の色の如く、私が心の鏡に澄渡つて静止した。世の中に筆取る人

しか知らない、味へない、視へない、尊嚴靜肅な唯一の瞬間である。雨の
 音、雨の音、私は直と其のま、筆を取つて、手頭が觸ると其の平かなわ
 りとした感覺の、云ふに云はれず快い白紙の上に、墨の色も濃く、『雨の音』
 と大きく三字、表題を書き記した。そして休まずに、
 雨の糸はわれを今、十年の昔に引き行けり。十年の昔、雨の響は琴な
 りき。われ此れを聴きて……………
 其の時突然、梯子段の下で、私の名を訊き正す高い調子の女の聲。筆持
 つまゝ驚き振り返る間もなく、廊下の足音と共に、濕つて張紙の弛んだ障
 子を無理に引開け、机の上のランプの光の僅かに達く座敷の片隅に、思ひ
 もかけない、彼の女の姿が現れた。私の春を樂しませた根岸の女である。
 「どうしたんです。今頃……………」

「手紙からばれたのよ。とう／＼お拂箱になつちまつたの。私もう宿無し却てせい／＼したわ。」

女は持前の透き通るやうな聲で高く笑ひながら、もう身も心も共に投掛けたと云ふ風で私の膝に寄りかゝり、見上げる顔に机の上を見て、

「雨の糸は、われを今、十年の昔に………何なの、これが小説なの？ 勉強して被居つたんでせう。すみませんでしたねえ。」

私は實に譬へられない絶望を感じた。ランプの光は依然として靜に、雨の音は依然として悲しいのに、突如として彼の美妙なる追憶の夢から、あさましい現實、汚れた壘の上に突落された私は、もう永久に詩人の權能を剝奪されたやうな氣がしたのである。膝の上なる女の重みは、宛ら石か鐵を脊に負ふやうな心持をさせる折も折、女は机の引出から、少しばかり巻

紙の端の出てるのを見付けて、突差の懷疑と嫉妬から引出の中を底まで見せて呉れと、我を忘れて迫る。其の感情の激動に暑さを感じて、何も疑はしいものゝ無い事を見済ますと、今度は如何にも大業に、「お、暑い。冷い水が欲しい。帯なんぞ取つちまふわ。」亂次ない姿になつて、「ほんとに疲れてよ。雨が降るのに車屋がゐないんですもの。」そこでゴロリと横になつた。

得やうとして、得た後の女ほど情無いものはない。この倦怠、絶望、嫌悪、何處から來るのであらう。花を散らす春の風は花を咲かした春の風である。果物を熟らす日の光の暖さは、やがて果物を腐らす日の光ではなにか。現實なければ産れない理想は決して現實と並行しない。何たる謎、矛盾であらう。昨日まで男の絶賞した女の特徴は、盡く變じて淺間しい短

所になつてしまふ。初めて逢つた時、彼の女の如何にも打ち解けて、人に怯
 ぢない物言ひは、快活ならずして不謹慎となり、斜に坐り、首を傾げ、肩
 をゆする其の態度は、男の心を魅する女らしい、柔い、美しさではなくて
 猥らな、厭らしいもの、限りであつた。休まない心の焦立ち、戀の悶えは
 條理のない女性の嫉妬からとしか思へなかつた。私は途方に暮れて、唯だ
 ぼんやり其の様子を打眺めるばかり、女が此後の身の振り方を問ひ追つて
 も、私は何とも即座に快答を與へることが出来ない。すると女は直ぐ泣き
 はじめた。私の膝に顔を押し當て、これまでの楽しさ嬉しさを涙に咽びなが
 ら繰返す、その途切れ／＼の胸から絞出すやうな言葉、啜り泣く涙の響は
 猶降り止まぬ雨の木の葉に滴り、屋根を打ち、軒の樋から溢れ落ちる水の
 音と一ツとなつて、しめやかな夜の澄み渡る燈火の光に悲痛な音楽を奏す

る。廊下にかゝつた古い柱時計が、折々際立つて、重い振子の音を響かせ
 る。廣からぬ一室の今まで濕つて薄寒かつた空氣は、次第々に白粉と髪
 の油の匂ひを帯びて蒸暑くなつて行くのが能く感じられる。私はやがて、
 繰返す女の言葉も途には途切れたなり聞えなくなつた時、ふと薄い裕の膝
 を透して、女の涙の生暖い潤ひを覺え出したが、すると、其の生暖い
 潤ひは、私の身内に浸み入つて、瞬きする間もなく全身の血を煮返らすや
 うな氣がした、かと思ふと、私は忽ち前後の思慮もなく、まるで酒に酔つ
 た時と同じやう、死ぬなら一緒に死ぬ。死んでも別れはしないと云ふやう
 な事を、云ふまいとしても云はずには居られなかつた……

私はもう殆ど、其れから後の事を語るに忍びない氣がする。もし私自身を悲劇の主人公として客觀的に語るならば、其の劇の中心は戀と藝術の衝突である。戀の如何なるかは誰れも知つて居やう。藝術の熱情の如何に押へ難きかは、あゝ、藝術家より外に知る人はない。ゲーテの『フォースト』を讀む毎に私は泣く。ゾラが『作品』の主人公たる畫家クロードは愛する妻を残して、何故夜半に獨り、そが未成の畫面に對して縊れて死んだか。ハツプロマンの劇『沈鐘』の主人公、鐘作りのハインリッヒは何故『山の乙女』に迷つたか、妻を捨てたか、子を捨てたか。イブセンが『死の目覺め』の主人公、彫刻家のルーベックは何故に、傷付ける其のモデルから、「作品は第一、活ける人間は第二。」と罵られたか。バルザックの『知られ

ざる傑作』にも奇怪なる畫家の自殺が描かれてゐる。世間の人の眼に藝術の人は狂氣としか思はれまい。思はれない事を私は寧ろ望んでゐる。強いて己れを辯護し、藝術の何たるかを衆俗に知らしめる必要は決してない。其の何たるかを知らしむるに、藝術は餘りに幽婉である神聖である。悲壯極りなきクリストの教さへ、末世に至つて救世軍の廣告的傳道によつて全く其の威嚴を失つた。主義の傳播鼓吹は其の何たるを問はず虚偽の方便と誇張と、狹猥な排他思想を産むばかりである。藝術を愛さば強ひて人をし、藝術を解せしめやうとする勿れ。唯だ解せんとするものをして、自ら解せしむれば充分である。

私は父母親族兄弟の、私に對する最初の憤怒、中途に擯斥、遂には憐憫また恐怖の情をも、今では全く念頭に置いてゐない。私は詩人だ、彼等は

普通の人間である。即ち互に異なる國の種族である。私は私が屬する國家對藝術の關係をも更に憤慨しては居ない。私は父母と争ひ教師に反抗し、猶且つ國家が要求せざる、寧ろ暴壓せんとする詩人たるべく、自ら望んで今日に至つたのである。其れだけの覺悟なしに居られやうか。過去封建時代の遺物たる博徒顔役の輩は已に現代に於ては無用の遊民であらうとは云へ、猶ほ犯罪者搜索の一便宜として、國家行政の機關が其の存在の意義を認めてゐる。詩人は其れにも劣つた無用の徒である、無賴漢である。迫害されるのは當然の理ではないか。然し何たる不思議ぞ、私は其程の屈辱にも拘らず、鳥歌ひ花開き、女笑ひ男走るを見れば、忽ち詩の熱情を感じて止まない。詩人は實に、國家が法則の鎌をもつて、刈り盡さうとしても刈り盡し得ず、雨と共に延び生へる惡草である、毒草である、雜草である、

島の作物とは違つて誰れも手を入れ肥料をやるものは無い。あの遠いフランスに於てさへ、フロールは藝術家は普通の人の受くべき幸福を受けやうと思つてはならぬと云つた。況や吾々日本の詩人、どうして妻を娶り家を作るが如き希望を抱き得やう。博徒にも劣る非國民、無賴の放浪者、これが永久吾々の甘受すべき名譽の稱號である。私は其れ故、三十歳の今日まで隨所に下宿住居を喜んだ。善良なる家庭の人と交る事を此方から潔よしとしなかつた。醜業汚辱の巷は私が唯一の公園であつた。ポードレールの詩集『惡の花』は私が無上の福音書であつた。それを今、あゝ何たる苦悶。私は妻ならぬ妻を持つ身になつたのだ。

根岸に圍はれてゐた人の妻は、生活の保護者から追放されたまゝ、私の處へ彷徨つた來た。女連れは下宿屋にも居りにくいので、多からぬ二人の

所持金を合せて、根津の神社に近く、薄暗い森陰の小家を借りて住む事とした。寝ても覺めても私の傍には、私の身を世界に唯一の頼りとする女一人が生きてゐるのだ。義務と責任の重さが堪られぬ程私の肩を壓へる。燈火を吹いて枕につき眠りに入る、其の日の最終の想ひは創作の苦心、翌日眼覺めて、日光を見る時最初に浮ぶ考へはまた此れ同じ詩の煩悶——藝術の苦惱それが直ちに無限の快樂であつた昨日の事を回想すると全く夢である。其の頃は、毎月の僅かな下宿代は新聞に投書する断片的の評論によつても得らるゝので、創作の感興來らざれば、詩集を懐にして公園の静かな樹下にさまよひ、さて感興來れば夜も眠らずに筆を取つて、其の曉幾分の餘裕を得れば、陶然として美人の歌を聴いた。空を飛ぶ鳥も及ばない、何と云ふ大膽な自由な境遇であつたらう。親の安否も兄弟の生死も氣に留め

ないばかりで無い、私は實に私の明日をも考へなかつたのだ。孤獨は時として寂しからう、辛からう。然し死んでも生きても、それは全く己れの好むところで、決して彼の堪へがたい恩愛や情誼の涙には捉はれずに濟む。私の眼には次第々に、女の姿が、私の藝術を滅す妖魔のやうに見えて來た。私は夜更けに木の葉の叫く聲、家に近く崖から落ちる清水の音などを耳にする、ミュッセが有名なる『夜』の詩に歌つたやう、詩の女神はありあり私の目の前に立現はれて、私に向つて一度び詩に捧げた私の心の變節を攻め歎き、又慰め誘ふ、其の細やかな言葉を聞くやうな心持さへした。私は如何なる残忍をも顧ず。断然女を振捨てやうと幾度決心したであらう。然し、あゝ女の涙、胸の蕪き、肉のあたゝかさ。私は幾度び、藝術を捨てゝも此の女を保護したい熱誠に動されたであらう。丁度梅雨の時節で

幾日と降りつゝいた雨が、ふと其の日の午後ひるすきに小止やみした。夜の明あけたやうに、パツと流ながれて来る日の光ひかりの強つよきは、もうすつかり夏なつである。家を廻めぐる樹木じゆもくの濕ぬれた木の葉はの面おもての一枚まい々々々は、其それから滴たる雫しづくと共に黄金こがねのやうに輝かがやく。重かさり合あつた薄暗うすくらい木立こだちの間あひだには、其そ處こにも烈はげしく射さ込む日の光ひかりが、風かぜの來くる度たび動どう搖よろする影かげと光ひかりの、何なんとも云いへぬ美うつくしい網目あみめの模様もようを作つくつて居ゐる。往來わうらいを隔へたてた千駄木ちだぎの崖がけの方ほうで、蟬せみの聲こゑが逸い早はやくも今年ことしの夏なつの新あたらしい歌うたを奏かなで出だした。幾匹いくひきの白しろい蝶てふが、何時いつの間まに生うまれて、何處いづこに今日けふまでの雨あめを凌しのいでゐたのか、まるで夢ゆめから出でたものゝやうに、ひら〜ひらの光ひかりの中なかを飛とんで來くる。私わたしはもう一瞬間いっしゆんかんも家うちに居ゐることは出で來きない。出で來きるかぎり遠とほく此この狭苦せまくるしい家うちから離はなれて、自由じゆうじゆう自在ざいに、さはやかな雨後うごの空くう氣きを吸すつて見みたい。行先ゆきさきを問とひたす女をんなには何處いづこへとも答こたへられず、

私わたしは其そのの儘まま戸外ととへ出でた。場末ばすえの殊更ことさら地面ぢめんの低ひくい根津ねづの貧まうしい町まちを通とほると、長屋中ながやちゆうの女房にようばが長雨ながあめに着古きふるしたつぎはぎの汚よごれた襦袢じゆはんや腰卷こしまきや、又または赤子あかこの襖おしろや下駄げたの齒はや臺所たいどころの小道具こどうぐなどを、氣きの狂ちがつたやうな凄すさましい勢いきほひで、洗あらひながら干ほしながら、大聲おほこゑに話はなして居ゐる、罵ののしつてゐる。其そのの周まわりに無數むすうの子供こどもが泣なき騒さわぎ、喧嘩けんかしてゐる。さう云いふ狭せまい横町よこまちをば僅わずかな近道ちかみちの爲ためにと、包つみを持ち尻しりを端折はしよつた中年ちゆうねんの男をとこが幾人いくにんも、突當つきたる人ひとの中なかを急いそがさうに通とほつて行ゆく。溝とほと云いふ溝とほからは盡ことごとく、濁にごつた雨水あまみづの流ながれもせずあふに溢あふれてゐるのみか、道みちの上うへにも跨またぎ兼かねるやうな溜水たまりみづの、幾個所いくかしょと知しれぬ其そのの面おもてに、今いまや白しろい雲くもの烈はげしく動うごき出だす青あおい澄すんだ空そらの色いろが美うつくしく反映はんえいして居ゐる。其そのの高たかい空そらから、細ほそい鳶とびの鳴聲なくこゑが遙はるかに落おちて來くる。いつもは此この裏街うらまちの生活せいくわつが重々おもむくしく私わたしの胸むねを押おさへるのであるが、今日けふは唯ただ何なんとなしに興味深きやうみふか

六二

く、かゝる處にもかゝる生活があるのかと寧ろ羨しいやうな氣がして、曲つた道の低い板屋根の間をば、曲るがまゝに歩いて行くと、忽ち廣い不忍池が目の前にひらけて、新しい蓮の葉の上に、遮るものもない日の光と青空の輝きが目射た。雨の後なる上野の森は再び新緑の時節に戻つたやうに青く、岸の柳が如何にも心持よく風に翻つて居る。と、遙か向う岸に連る二階家の、唯ある欄干に、一面の日光を受けて、燃るやうな赤いものが干してある。女の襦袢か、夜具の裏地か。あの連なる二階家の一軒で、私はこの春のまだ寒い夕暮に、今日は置き去りにして來た女と計らず出會つて話をしたのだ。思起すと、私はもう一足も其の方へ近づくのに堪えぬやうな氣がして、逃るが如く東照宮の石段を上つて、杉の木立の中に迷ひ入つた。

六三

私は最早や、あの女を振捨てやうとも、又は世話しやうとも、何れにも思ひ悩まぬ方がよいと思つた。振捨てるのは餘りに無情である。一生涯連添つて日一日に二人とも老いて行くのを見て居るのは猶更忍びない。私は一瞬間でも其れ等の煩悶を忘れねばならぬ、忘れねば生きて居られぬほど苦しんでゐるのだ。私は靜に立つてゐる樹の幹や、其の薄暗い根元の、此處にも溜る雨の水に青空の反映を見るよりも、いつそ人や車の音の烈しい處へでも行つた方がと心付いて、其頃は鐵道馬車で、直ぐと淺草へ行つた。軽い下駄の響き、仲店の賑ひ、色さまざまな商品の陳列。其の中でも殊更に花簪や半襟の店先一ぱい、紅や緑や紫や、又は絞り縹取り染模様のさまざまに、閃く焔の如く飾り立てられたのを見ると、私は娘のやうに心も浮かれて引寄せられたが、其れ等の華美を極めた色彩は、却て盛の絶頂

に達して今はたに散るのを待つ花に對するやうな果敢い氣をさせる。肉付のいゝ若い女が幾人も、赤い潰番の結綿に、もうはでな中形の浴衣を着て引掛け帯もしだらなく、歩む度毎に眞白い足の裏を見せながら行く。然し其れをも私は、自分ながら不思議に思ふほど、物淋しい心持でしか眺める事が出来なかつた。どうしたのであらう。私は雨上りの涼しい風の云ふに云はれず心持のよい事を能く感じてゐる。私は雨上りの晴れた日光に、凡ての物の色の驚くほど美しく私の眼を射る事を知つて居る。其れにも係らず見えざる心の片隅に隠れてゐる知れざる悲しみ。どうして美しく見える物、心地よく感じられる事が、今日に限つて、直ちに悲しく淋しく思はれるのであらう。歩いて行く足が自然と長い敷石の上をやがて、大きな提灯の下つてゐる観音堂の階段の下まで私を連れて行つた。

空から滑り落ちて来るやうな恐しい瓦屋根の、見上げる廣い軒に遮られて、絶えず參詣の人の昇降する階段は、丁度半ほどまで、烈しい夏の日に照され、段の角毎に張付けた鐵板が焼けるやうに光つてゐる。下から仰ぐと、殆ど眞暗な本堂の中には、釣した大提灯の磨いた金々具の裏ばかりが見え、風の吹き込む時々、正面の入口に置いた大きな香爐の吐出す香しい烟が、日の光の中には青色して、階段の下まで漂つて来るのが見分けられる。私は階段を上つた。何處にしても廣大な建築物の内部に於て感ずる空氣の冷靜と、日光から遠かつた幽暗の氣とが、殊に仲店の賑ひを通り過ぎて来た身には一層強く感じられて、同時に廣々とした堂内をも稍狭苦しく覺えさせる大提灯や、釣燈籠や、太い柱や、其の陰に置いた廚子や偶像や、又は高く振仰ぐ天井の數知れぬ奉納の畫額や、夥しい欄間の彫刻や

見廻す四邊一帶の、剥げて、褪めて、古びた色彩の薄暗さが、云ふに云はれず柔かに人の心を沈静させる。私は今日初めて、この本堂を見たやうな意外な心持がして、向うを眺めると、参詣の人の俯向く無数の頭を越え、船かと思ふ大きな賽銭箱を前にして、遙かに、奥深く、幾多の雪灯を連ね點した佛壇が、細かにゆらめく鈍い其の光で、献物の彫刻や造花の金色をおぼろに輝すばかり。参詣の群集をしては、とても仔細に其の内部を覗はしむるに堪へぬ程、無限の神秘を帯びて、闇の中から現はれた夢のやうに浮いて居た。

「何處か分らぬ奥の方で、ざら／＼と、多分賽銭箱の錢をあけるらしい響がする。人々の吐く祈禱の聲が、書額の陰にとよまつて鳴く鳩の聲に交る。私は、いつも觀察の興味に饑える藝術家の好奇心ばかりではなく、日中に

見る燈火の光、暗然たる古色に對する憂鬱の情の心持よさに、太い柱の陰に安置した眞赤な偶像の前に立止つたまゝ、出入の烈しい参詣の人々の様子子をば、餘念もなく眺めて居た。突然、藝者らしい一人の女、然し、もう人目を引く華麗な姿ではなく、其の土地では一口に姉さんで通るかと思ふ年頃の、濼いつくりの女が、向からも不審らしく私と顔を見合したが、忽ち「まア」と驚いて、私の名を呼びつゝ、靜に歩み寄り、

「ほんとにお久振りですねえ、お變りも御在ませんの。お一人ですか。」とツと四邊を眺めた。

「私も。是非一度會ひたいとは思つて居たんだけど、何ぼ何でも、會はず顔がないから。」

私はおそろ／＼相手の顔色を伺つた。忘れもせぬ小菊と云つて、私が二

十二の時、死なうと約束した其の女である。小菊は別に私を恨む様子もな
く、然しまるで昔の人ではないやうな、沈着いた聲音になつて、
「ほんとに夢だわねえ。何て云つたつて若い時分でなくつちや駄目よ。そ
こへ行くと男の方はねえ。」と淋しく微笑む。
「いくつになるんだつけね。」

「二十八。」

「それぢや、まだ盛りぢやないか。」

「あら、御冗談ですよ。それア氣の若い人ならさうかも知れないけれど、
私アもう、全く世の中に飽きちまつて居るのよ。」

又も小錢をあけるらしい怪し氣な響、鳩の鳴く聲。久しく堂内の日陰に
居た單衣の肌には、廊下を傳つて流れて來る風が、いやに薄寒く感じられ

て來た。

「何時だらう。一人かい。久振りだ、其邊で御飯でもたべやうか。」

「えゝ。御迷惑ぢやなくつて。」

並んで階段を下りた。

十

降り續いた昨日までの薄暗い雨の日に比較して、晴れた夏の日は驚くば
かり永かつた。私は五重の塔を廻つて鐘撞堂の陰なる小料理屋を出で、雷
門の往來で車に乗つて歸る小菊を見送り果てゝも、あたりはまだ明い。無
論、その邊の料理屋商店に瓦斯の火はついて居たが、烈しい夕陽は西の空

一面を紅にして、見渡す往來のはづれに本願寺の高い屋根が恐しいほど眞黒に聳えてゐる。其の上に浮んだ雲のちぎれの、白く薄いものは全く黄金色に燦き、黒く大きく棚曳くものは、濃い紫色になつて、中には其の一面だけ薔薇色に染められたのもある。然し見詰めると一瞬毎に、目を射る烈しい色彩の狂ひも、眞暗な夜に向つて徐々として薄れ消えて行く。私は小菊の話を其れとなく思ひ返した。小菊は死ぬ約束を水にして姿を隠してしまつた私の事を、今では少しも悪くは思つて居ない。却て有難いと思つてゐる。あの事があつたばかりに、若いもの達が楽しい戀に狂ふのを見ても自分の姿の衰へて行く老いて行く今日を、更に淋しいとも悲しいとも思つて居ないと云つた。かの女は二十五を過ぎてからの女の心には色も戀もない。自分から死ぬ譯にも行かない一生涯を、どうしたら唯日常の衣食住に

苦勞する事なく送つて行かれるか、此の現實の問題の爲めには、随分見るも厭な男の世話になつて不平たらしく暮して行くものだと言ひ、十八九の若い時分を顧みては、あの時分には「死ぬ」と云ふことまでが、たわいも無い冗談の一ツであつた。悲哀や苦痛はつまり楽しい青春の夢を、猶樂しく強く味せた刺戟劑に過ぎないと云つた。さうに違ひない。さうに違ひない。女の十八、男の二十歳は實に麗しいものである。私は何故、根津の家に残したあの女をば、切れる別れると必要もない時にまで云出して、泣かずともすむ事をわざと泣いては抱合つて見た廿歳の時の其のやうに、何故何故、振切つてしまふ勇氣が出ないのであらう。振切つた後の女の身の上や、又は人に嘆きを掛ける自分の行末までが、何故さう譯もなく、忍び得られぬほど氣遣はれるのであらう。

私は鐵道馬車に揺られながら、いろ／＼と根津の家に居る女の事を考へつづけた。私が今、振切つてしまつたなら、差當り行き處のない彼の女は一筋に思詰めて死にはしまいかとも危まれる。死なぬにした處が、いつも私に訴へるやう、もう二度と再び男と遊ぶ歡樂の夢を見る事はあるまい。荒んだ心を一日も早く破滅の老境に托しやうと急るであらう。あゝ、彼の女は實に遊ぶ事が好きであつた。青空さへ見れば何處までも歩く。合乗の車でないならば、どんな遠道でも、暗い夜でも私と手を引かれて歩く方と云つた。空が曇つてぼつり／＼降り出した雨が、蔽冠さる櫻の花に遮られて、それほどには着物を湿さぬのを幸ひと、夜の十二時過ぎ向島の長堤を言問ひ近くまで歩いた事があつた。思返すと誰にも換へがたい程戀しい懐しい。それほど戀しい懐しい追懐が、どうして妻と呼ぶべき現實の彼の

女に對して、過去の通りの恍惚を感せしめぬのであらう。私は誰をも恨まぬ、私はたゞ私を憤る、私の心を嘆く……………
 不忍の池に星が映り、絃歌が聞え、根津の裏町に蚊柱の立迷ふ頃、私は全く疲れて家へ歸つて來た。涼しいランプの光の中に、彼の女は美しくも夕化粧した上に外出の着物まで着換へて、私の歸りを待つて居たらしい様子であつた。「お歸んなさい」との如何にも沈着いた一聲。いつも／＼見捨てられはせぬかと、男の心の變動を疑ふ物狂はしい様子とは全く變つて、彼の女は私が寧ろ氣味悪る氣に目成る其の顔を眺めて、問はるゝまゝに事情を話した。今日の午後私の出た後に、かの待合の主婦が訪ねて來て、一時の不届きを憤つて妾宅から追出しはしたものの、辛抱する氣さへあれば元通りに圍つてやらうと云ふ先方の意志を傳へ、利害の問題をこま／＼云ひ

聞かした。それで話の結果は兎も角、會ふべき約束をした故これから行つて見ねばならぬとの事であつた。

私は今までの混亂した感情を一時に忘れてしまつて、どんな無理をしても彼の女を引止めたいと云ふ氣になつた。その夜十二時近くに歸つて來た女を待つて、私は心の限り言葉の限りに訴へて見たが、あゝ然し、女は唯だ泣き沈むばかりで、翌日になると到頭公然と別れ話を申し出した。私は一生あなたの事は忘れません、私はもうあれだけ嬉しい思ひをすれば、女冥利にも盡きる位ですもの。實は田舎に母親もありますし、その方の世話もしなければなりませんから、矢張り私はお金で買はれた玩弄になつて、花が咲かうが、花が散らうが、目を潰つて暮しませう。早く年を取つて芝居一ツ見たくない様になつて仕舞ひたい。こんな言葉を最後に、其の日は



もう浴衣を脱捨てたい位な炎暑の日盛りを、女は往來の眞白に乾いた砂の上を眞黒なその影と共に、遂に私の眼から消えてしまつた。

私は別れたなり、更に其の後の消息を知らない。無論知らうと思へば、方法はいくらもあらう。然し互に出會つた處で、二度あのやうな華々しい戀を味ふ事が出来るだらうか。早く年を取つて芝居一ツ見たくない様になりたいと云つた言葉が、私の心には死の報知よりも悲しく響く。私はもう四十だ。さらでも早く年を取る女の事、私は昔馴染んだ女を見るに忍びない氣がする。強ひても見たくないと思つてゐる………

先生は長々と過去の戀を物語つた後、私をば電車通まで送つて来て呉れる。静な芝の公園、木の葉ばかりか空の星さへが優しい音楽を奏するかと思ふ初夏の夜。先生は獨語のやうに、「自然はいつも老いずに詩人を慰めるが、詩人の命は春に逢ふ度に衰へて行く。自然はいつも同じ春しか繰返さないが、然し詩は時代と共に動いて、昨日の古い調の繰返される事を決して喜ばない。こゝにも矛盾がある。」と云つた。

芝から小石川のはづれまで、私は長い電車の道中、いつも先生の愛誦する詩の中でジャン、モレアスの、

Goûtez tous les plaisirs et souffrez tous les maux

Et dites; C'est beaucoup, et c'est l'ombre d'un rêve.

餘す處なく歡びを味ひ、餘す處なく痛苦をなめよ。

而して語れ。其れにて足りぬ。夢の影よと。
と云ふ句を何となしに幾度か悲しく思ひ返した。

監獄署の裏

— 兄閣下

お手紙ありがとうございました。御座います。無事歸朝しましてもう四五個月になりました。

然し御存じの通り西洋へ行つても此れと定つた職業は見出さず、學位の肩書も取れず、収集めたものは、芝居とオペラと音楽會の番組に、女藝人の寫真と裸體畫ばかり。年は已に三十歳になりますが、まだ家をなす譯には行かないので今だにぐづくと父が屋敷の一室に閉居して居ります。處

は、市ヶ谷監獄署の裏手で、この近所では、見付の稍々大い門構へ、高い樹木がこんもりと繁つて居ますから、近邊で父の名前をお聞きになれば、直ぐにそれと分りませう。

私は當分、何にもせず、此處に、かうして居るより仕様がありません、一生涯かうして居るのかも知れません。然し、此の境遇は、私に取つては別に意外な現象と云ふのでは無い。日本に歸つたら、どうしやうと云ふ問題は、萬事を忘れて音楽を聴いて居る最中、戀人の接吻に酔つて居る最中若葉の蔭からセーヌ河の夕暮を眺めて居る最中にも、絶えず自分の心に浮んで來た散々に自分の心を惱した久しい古い問題です。私は白状します。意氣地のない私が、案外にあれ程久しく、淋しい月日を旅の境遇に送り得たのも、つまりは、止み難い藝術の憧憬と云ふよりも、苦しい此問題の解

決がつかなかつた爲めです。外國ですと、身體に故障のない限りは、決して飢えると云ふ恐れが有りません。料理屋の給仕人でも、商店の賣子でも新聞の廣告をたよりに名譽を捨鉢の身の上は、何でも出來ます。「紳士」と云ふ偽善の體面を持たぬ方が、第一に世を欺くと云ふ心に疚しい事がなく社會の眞相を覗ひ、人生の誠の涙に觸れる機會もまた多い。あゝ然し、一度び生れた故郷へ歸つては——生れた土地ほど狭苦しい處はない——まさか其處までは周囲の事情が許さず、自分の身も亦それ程潔く虚榮心から超絶して仕舞ふ事が出來ない。私は、霧の海に漂ふ小舟のやう、何一ツ前途の方針、將來の計畫もなしに、低い平い板屋根と、怪物のやうに屈曲れた眞黒な松の木が立つて居る神戸へ着きました。事によれば知人の多い東京へは行かず、この邊へ足を留め、身を隠さうかとも思つて居た。其の

矢先です。混雑の船梯子を上つて、底に力のある感激の一聲——
兄さん。御無事で、と云つて、私の前に現れたのは、大學の制服をつけた私の弟でした。この兩三年は殊更に、自然々と音信も不通になつた父親が、大層心配して、汽船會社に聞合し、自分の乗込んだ船を知り、弟を迎ひに差向けたと云ふ次第が分りました。

私は覺えず、顔を隠したいほど恐縮しました、同時に私はもう、親の慈愛には他々したやうな心持もしました。親は何故不孝な其の兒を打捨て、仕舞はないのでせう。兒は何故親に對する感謝の念に迫られるのでせう。無理にも感謝せまいと思ふと、何故それが、我ながら苦しく空恐ろしく感ぜられるのでせう。あゝ人間が血族の關係ほど重苦しく不快極りなきものは無い。親友にしる、戀人にしる、妻にしる、其の關係は、如何に餘儀な

くとも、堅くとも、苦しくとも、それは自個が一度び意識して結んだものです。親兄弟、こればかりは先天的に、どんな事をしても断ち得ないものです。断ち得たにしても、堪えがたい良心の苦痛が残ります。實に因果です。フアタリテ一です。閣下よ。閣下は閣下が家の軒に巢を造る雀を御覽になりましたらう。雀の子は巢を飛び立つと同時に、この惡運命の陰からすつかり離れて仕舞ひます。其の親も又、道德の繩で子雀の心を繋かうとは思つて居ないらしいです。

私は一目弟の顔を見ると、同じ血から生れて、自分と能く似て居る其の顔を見ると、あゝ、何と云ふ残酷な感激に迫られましたらう。云はれぬ懐しい心と共に、この年月の放浪の悲しみ、喜び、凡ての活々した自由な感情は、名残もなく消えて仕舞つたやうな氣がしました。身のまはりの空

六
氣は忽ち、話に聞く中世紀の修道院の中もかくやとばかり、氷の如く冷かに鏡の如く透明に沈静したやうに思はれました。

弟は云ひます——兄さん、六時の汽車が急行です。切符を買ひませう。私は何とも答へませんでした。私は神戸のステーションで、品格のない

然し肉付のいゝ、若いアメリカの女が二三人、花賣りから花束を買つて居るのを見たけです。私は其の翌日の朝、新橋に着き人力車で、市ヶ谷監獄署の裏手なる、父の邸宅へ送り込まれました。

其の夜、家ではいさゝかの酒宴が催されました。父は今年六十。たとへ事情は何であつても表向きは、家の嫡子と云ふ體面を重ざる爲めでせう。私をば、東坡書隨大小眞行皆斌媚可喜處老媛書と書いた私には讀めない掛物を掛けた床の間の前に坐らせ、向ひ合つては父と母。私の右には母の實

七
家を相續して、教會の牧師になつて居る二番目の弟、左には、私を出迎ひした季の弟が制服の金ボタンいかめしく坐りました。父は少し其の口髯が白くなつたばかりで、銅のやうな顔色はますます輝き、頑丈な身體は年と共に若返つて行くやうに見えました。母は私の留守に十年二十年も一時に老込んで仕舞ひました。小く萎びた、見るかげもないお婆さんになつて仕舞ひました。

私は敢えて妻、戀人ばかりではない。母親をも、永久に若い美しい花やかな人を持つて居たいのです。私は老込んだ母の様子を見ると、實際、箸を取る氣もなくなりました。悲しい、情ない……其れよりも最ツと強い、混亂した感に打れます。不朽でない人間の運命に對する烈しい反抗をも覺えます。

閣下よ。私の母は私が西洋に行く前までは、實に若い人でした。さほどに懇意でない人は、必ず、私の母をば姉であらうと訊いた位でした。江戸の生れで大の芝居好き、長唄が上手で、琴もよく弾きました。三十歳を半ば過しても、六本の高調子で、吾妻八景の、

松葉かんざし、うたすじの道の石ふみ、露ふみわけて、ふくむ矢立の、すみイダ河……

と云ふ處なぞを、樂に歌つたものでした。其で居て、十代の娘時分から赤いものが大嫌ひだつたさうで、土用の蟲干の時にも、私は柿色の三升格子や、水淺黄の千鳥に白浪の友禪染の外、何一ツ花々しい長襦袢なぞ見た事はなかつた。私は忘れませんが、母に連れられ、乳母に抱かれ、久松座、新富座、千歳座なぞの棧敷で、鰻飯の重詰を物珍しく食べた事、冬の日の

置炬燵で、母が買集めた彦三や田之助の錦繪を繰り広げ、過ぎ去つた時代の藝術談を聞いた事。あゝ！凡ての物を破壊してしまふ、『時間』ほど酷いものはない。閣下よ。私は母親といつまでも、楽しく面白く華美一ぱいに暮りたいのです。私は母の爲めならば、如何な寒い日にも、竹屋の渡しを渡つて、江戸名物の櫻餅を買つて來ませう。然し私は厭です。如何に暖い日でも藥を買ひに行く事は厭です。

私はどうしても、昔から人間の守るべきものと定められた教へに伏する事が出来ません。教へは餘りに酷い、餘りに冷い。私はどうかして、教へに服するよりも、『教』と『私』とが、暖かに滑かに一致して行くやうにならぬものかと、幾度び願ひ、悶へ、苦しみましたらう。絶望した私は遂に潔く天罰、應報と相ひ争ひ、相ひ對峙しやうと思ふやうになつて仕舞ひました

私の父は嚴格な人です。勤勉な人です。悪を憎む事の激しい人です。父は私が歸朝の翌日、靜かに將來の方針を質問されました。如何にして、男子一個の名譽を保ち、國民の義務を全うすべきか、と云ふ問題です。

語學の教師にならうか。いや。私は到底心に安んじて、教鞭を把る事は出来ない。フランス語ならば、私よりも、フランス人の方が更に能くフランス語を知つて居る。

新聞記者にならうか。いや。私は事によつたら盜賊をする事があるかも知れない。然し不幸にしてまだ、私は正義と人道とを商品的に取扱ふほど悪徳に馴れて居ない。私は若し社會が萬朝報や二六新聞によつて矯正されるならば、其の矯正された社會は、矯正されざる社會よりも、更に暗黒なものとなるのであらう、と云ふ事を餘りに心配して居る。

雜誌記者とならうか。いや、私は自ら立つて世に叫ばうとするほど社會の發達人類の幸福の爲めに夜の目も眠らず心配して居るのではない。私は親子相啣み、兄妹相姦する獸類の生活をば、少しも痛ましく、少しも厭はしく思つて居ない。

藝術家とならうか。いや。日本は日本にして、西洋ではなかつた。これは日本の社會が要求せぬばかりか、寧ろ迷惑とするものである。國家が尙追教育を設けて、吾々に開關以來大和民族が發音した事のない、T、V、D、F、なぞから成る怪音奇聲を強ひ、もし此れを發し得ずんば明治の社會に生存の資格なきまでに至たらしめたのは、蓋し、他日吾々に何々式水雷とか鐵砲とかを發明させるが主眼であつて、決してヴェルレーヌやマラルメの詩などを歌はせる爲めではなく、革命の歌マルセイエーズや、軍隊開放

の歌アンテルナショナルを唱へしめる爲めでは、猶更ない。吾等にして、若し誠の心の底から、ミューズやヴェヌスの神に身を捧げる覺悟ならば、吾等は立琴を抱くに先立つて、法規きびしい吾等が祖國を去るに如くはない。これ國家の爲めにも、又藝術の爲めにも、双方の利益便利であらう。

あゝ、あゝ。この世の中に、私の餘命を支へて呉れる職業は一つもない。私は寧ろ、巷にさまよつて車でも引かうか。いや、私は餘りに責任を重ずる。客を載せて走る間、私は果して怪我なく安全に其の職責を盡す事が出来るだらうか。下男となつた飯を焚かうか、無数の米粒の中に、もしや見えざる石の片があつて、食へる主人が胃を破り其の生命を瑕付けはせまいか。人間若し正確細微の意識を有する限りは、如何なる賤しい職業をも、自ら進んで爲し得べきものではない。其處には、是非とも、飢えて凍えて

正確な意識の一部的魔酔の必要がある。自我の利欲に目の眩む必要がある。少くとも、古來聖賢の道を蔑ろにする必要がある。生活難を謳へる人よ。

あゝ。私は諸君が羨しいです。

私は父に向つて、世の中にもする事はない。狂人か、不具者と思つて、世間らしい望みを嘲して呉れぬやうにと答へました。

父も亦、新聞屋だの、書記だの、小使だのと、つまらん職業に我が子の名前を出されては、却つて一家の名譽に關する。家には幸ひ、空間もある食物もある。黙つて、おとなしくして、引込んで居て呉れ、と話を極められました。

私は半年ばかり、毎日ぼんやり、庭を眺めて日を送つて居ます。

八月の暑い日の光が、広い庭一面の青い苔の上に、繁つた樹木のかげを投げて居ます。眞黒な木の葉の影の間々に、強い日光が斑々に、風の来る時揺れ動くのが、何とも云へず美しい。蟬がなく。鴉がなく。然し世間は炎暑につかれて夜のやうに寂として居ます。忽然夕立が來ます。空の大半は青く晴れて居ますから、四邊は明いので、太い雨の糸がはつきり見えまゝす。芭蕉、芙蓉、萩、野菊、撫子、楓の枝。雨に打たれる、それ／＼の植物は、それ／＼違ふ強さ弱さに従つて、或るものは地に伏し或るものは却つて高く反り返り、又は、其の葉の厚さ薄さに従つて、或は重く或は軽くさまざまの音を響かせます。この夕立の大合奏は、轟き渡る雷の大太鼓に強く高まるクレツサンドの調子凄じく、やがて、優しい青蛙の笛のモデラトに、其の來る時と同じやう、忽然として搔消すやうに止んで仕舞ふ。す

と庭中は空に聳ゆる高い梢から石の間に匍ふ熊笹の葉末まで、水晶の珠を連ねて驚くばかりに光澤をます青苔の上に、雲かと思ふ木立の影は、長く斜に移り行き、日暮しの聲聞えて、夕暮が來ます。風鈴の音は頻りに動いて座敷の岐阜提灯に灯がつくと、門外の往來には非やかな軽い下駄の音女の子の笑ひ聲、書生の詩吟、ハーモニカ、何處か遠い處で花火のやうな響もします。新内が流して行きます。夜が更ける……

虫の音が日に増し滋くなつて、枕に就いて眠らうとすると、雨戸を閉めた庭一面から縁の下まで恐しい程な其の啼き聲。凡そ何萬匹の昆虫が如何なる力に支配されて、何を感じて、かくも一時に聲を合せて、私の身のまはりに叫ぶのでせう。私は限りもない空の下、雄大なる平原の面に唯つた一人永遠の夜明けを待ちつゝ、野宿して居るやうな氣がして、閉じた險を開

いて見ると、今にも落ちて来さうな低い板の天井と、色も飾もない壁と襖とが、机の上の燈火に照らされて薄暗く狭苦しく私の身體を圍つて居るのです。深味のない、限られた日本の生活と云ふ事が、しみじみ感じられます。突然天井裏に、ばらツばらツと、破れた琴を弾くやうな雨の雫の落ちる音。夜の樹木に風の吹く響が聞えます。然しこの響は幽谷に獅子の吠えるやうな底深いものではないので、私は熱帯の平原を流れる大河のほとりに、葦の葉の戦ぎを聞くのかと思つた事がありました。虫は絶えず鳴いて居ます。夜があけても、晝が來ても鳴き續けるのです。虫ばかりではない雨も毎日々々降りつくやうになりました。

何と云ふ濕氣の多い氣候でせう。障子を閉めきつて、座敷の片隅には火鉢に火を入れて見ても、着て居る着物までが潤れるやうで、私は魚介のや

うに皮膚に鱗が生へやしないかと思ふ程です。亞米利加を去る時、ロザリオンが別れの形見に與れた「クラシンスカ伯爵夫人の日記」と云ふ、立派な羊の皮の表装は、見るかげもなく微びて仕舞ひました。巴里の舞踏場で、イボンと踊つた漆の塗靴は化物のやうに白い毛をふき、ブーロンエの公園の草の上に、ヘレー子と横はつた夏外套も無慘な斑點を生じた。

物賣りの聲裏悲しく、彼方此方に人の雨戸を繰る音が聞えて、夜が來ると、あゝ、日本の夜の暗い事は、とても言葉には云盡せません。死よりも慕よりも暗い、冷い、淋しい。如何なる憤怒、絶望の刃を以てするも劈きがたく、如何なる怨恨、惡熱の焰を以てするも破り難い關の壁とでも云ひませうか。私は、たつた一ツ、廣い座敷の真中について居る暗い石油ランプの笠の下に、楽しい月日に取りやりした彼の人の手紙を讀み返し……

読み盡し得ずして其の上に顔を押當て、泣き伏します。庭一面、相も變らぬ蟲の聲。

然し、私はやがてこの暗い夜、この悲しい夜の一夜毎に、鳴きしきる蟲の叫びの、次第に力なく弱つて行くのを知りました。私はいつか裕の上に新しい綿入羽織を着て居ます、新しい呉服物の、染糸の匂が妙に胸悪く鼻につきます。雨はもう降りません。朝夕の冷かさに引換へて、日の照る晝過ぎは恐しい程暑い。木の葉は已に黄ばんで、風のないにはらくと苦の上に着るのをば、この夏らしい烈しい日の光に眺めやるのが、私には何れほど不可思議に感ぜられるでせう。このあたり木の葉は散る春の四月と、佛蘭西の或詩人が南亞米利加の氣候を歌つた其のやうな、幽愁の味深い心持がします。読みさしの詩集なぞ手にしたまゝ、唯ある晝過ぎ庭に

出て、植込の間を歩むと、差込む日の光は、梅や楓や、茂つた木の葉の重りを一枚々に照すばかりか、苔蒸す土の上に、其れ等の影を模様はやうに描いて居ます。この影の奥深くに、四阿屋がある。腰をかけると、後は遮るものもない花鳥なので、廣々と踏み渡つた青空が一目に打仰がれる。西から東へと、この廣い大空を白い薄雲が刷毛でなすつた様に流れて居ましたが、いつまで眺めて居ても、少しも動かない。無数の蜻蛉が、フランスの夏の空高く見る燕のやうに飛交つてゐる。鳥は熊笹茂る隅々まで一面の烈しい日の光に、屋根よりも高いコスモスが種々の色に咲き亂れて居る。葉鶏頭の紅が燃え立つやう。桔梗や紫苑の紫は、猶ほ鮮かなのに、早くも盛りを過ぎた白萩は、泣き伏す女の亂れた髪はやう四阿屋の敷瓦の上、私の足元まで流るゝ如く倒れて居る。生き残つた蟲の音が一條二條、露深い

其の陰に糸よりも細く聞えます。

あゝ、忘れし夏の形見。この青空、この光。何として、これが十月、これが秋とは思へませう。膝の上なる詩集の頁は、風なき風に翻つて、ポードレールの悲しい「秋の歌。」

Ah! laissez-moi, non front posé sur vos genoux

Gouter, en regrettant l'été blanc et torride,

De l'arrière saison le rayon jaune et doux!

「あゝ、君が膝にわが額を押當て、暑くして白き夏の昔を嘆き、軟かにして黄き晩秋の光を味はしめよ。」と云ふ末節の文字を明かに讀ませます。私は何に限らず、例へば美しく咲く花を見れば、これ散り萎む時の哀れさを思はせる爲めに咲いて居るのでは無いかと思ふ。楽しい戀の酔ひ心地

は別れた後の悲しみを味はしめる爲めとしか思はれませぬ。秋の日光は、明日来る冬の悲しさを思知れとて、かやうに麗しく輝いて居るのでせう。私は妙に心も急ぎ立つて、一分一秒も長く、薄れ行く日の光を見たいと思つて、其の頃は庭のみならず、折々は門を出で、家の近くをも散歩に出掛けました。あゝ、秋の日、故郷の秋の日は、如何なる景色を私に紹介しましたらう……

手紙の初めにも申し上げたやう、私の家は市ヶ谷監獄署の裏手で御座います。五六年前私が旅立ちする時分には、此邊は極く閑静な田舎でした。下町の姉さん達は杜鵑花の花の咲く處と説明されて初めて、あゝ然うですかと漸と合點する位でしたが、今ではすつかり、場末の新開地になつて了ひ

ました。變りのないのは、狭い往來を歴して聳立つ、長い監獄署の土手と
其の下の貧しい場末の人の生活とです。

私の門前には、先づ見るも汚らしく雨に曝らされた獄吏の屋敷の板塀が
長くついで、其れからが例の恐しい土手は、いつも狭い往來中を日陰に
して、猶其の上に剛一匹も潜れぬやうな茨の垣が其の刺を伸して居ます。

土手には一ぱい、觸れば手も脹れ痛む鬼藪なぞ、恐しい雑草の茂り。私は
以前二百十日の時分には、屹度、立續く此の獄吏の屋敷の板塀が暴風で吹
倒される、すると、往來には近所の樹木の吹折られた枝が、無慘に落ち散

つて居る其の翌日の朝、圓い竹の皮の笠を冠り其の襟に番號を書いた柿色
の筒袖を着、二人づゝ鎖で腰を繋かれた懲役人が、制服佩劍の獄吏に指揮
されて、吹倒された板塀をば引起し修繕して居るのを見たものです。夏の

盛りの折々には、矢張り一隊の囚人が、土手の悪草を刈つて居る事もあり
ました。其れをば通行の人々が、氣味悪さうな目付をしながら、而も物珍
しさうに黙つて、立止つて見て居ます。

土手はやがて左右から奥深く曲つて、其處には柱の太い黒い澁塗りの大
きな門があります。其の扉はいつでも重さうに堅く閉ざれて居て、細い烟

出しが一本、ひよろりと立つて居る低い瓦屋根と、四五本の瘦せた杉の木
立の望まれる外には、門内には何一ツ外から見えるもの、聞える聲もない

で、この四五本の杉の木、かくも淋しく別れ／＼に立つて居る有様が、
私の目には、獄舎の庭では、夜陰に無情の樹木までが、互に悪事の計畫を
呷きはせぬかと疑はれ、此くは遠ざけ距てられて居るのであらうとさへ思
はれるのです。

門から續いて、高い土手が忽ち盡きると、狭い往來は迂曲した坂になり片側は私の知らぬ間にいつか、金持らしい紳士の新宅になつて、石垣が高く築かれましたが其の向ひの片側は、昔から少しも變りのない貸長屋で、下り行く坂道に従つて、長屋は一軒々々、箱を並べたやうに重つて居ます。後一面、監獄署の土手に遮られて居るので、この長屋には日の光のさした事がない。土壁はもう腐つて苔が生へ、格子戸の外に晝は並べた雨戸の襖は蟲が喰つて穴をあけて居る。いつでも其の中の二三軒には、拙ない文字で貸家札の張られて居ない事はない。内職の札の下つて居ない事はない。私は以前、よく此の前を通る時には、寒い冬の夕方、薄暗い小窓の、すゝけた破れ障子に、中なるランプの灯が、後毛を亂した女の帯なぞ締め直して居る薄い影をば映し出して居るのを見ました。蒸暑い夏の夜には、疎な

窓の簾を越して、かう云ふ人達の家庭の秘密をすつかり一目に見透してしまふ事があつた。今でも多分變りはあるまい、私は午後の時々、この貸長屋の窓下をば、監獄署から流し出す、懲役人の使つた風呂の水が、何んとも云へぬ悪臭と氣味悪い蒸發氣を立てながら、下水の溝から溢れ出て居た事を記憶して居る。すると驚くべきは、この邊に住んで居る女房達で、寒い日和には、其れをば頻と便利がつて厠物だらけの赤子を脊負ひ、汚い齒を出して無駄口をきながら、物なぞを洗つて居り、又夏中だと、遠慮なく臭い水をば往來へ撒いて居たものです。

さて坂を下り盡すと、兩側に居並ぶ駄菓子屋、荒物屋、煙草屋、八百屋、薪屋と、いづれも見すばらしい小賣店の間に、米屋と醤油屋だけは、柱の太い昔風の家構が、何となく憎々しく、漠とした反抗心を起させます……

と云つて、それは社會主義なぞ云ふ近代的の感想ではなく、家構が古い形だけに、兒雷也だとか鼠小僧だとか、舊劇で見るやうな義賊の空想に過ぎない。不思議なのは二軒ほど古い石屋の店のある事で、近頃になつて目について増加したのは、天獄羅の仕出し屋と魚屋とである。これは、日に増し建てられる貸長屋で、界限が一時に開けて來た證據であらう。青苔の薄氣味わるく生へた板の上、油で濁つた半臺の水の中に、さまざまな魚類の死骸や切りそいだ其の肉片、串ざしにした日干しの貝類を並べて、一ツ一ツに値段を書いた付木の剝板をば其の間にさしてあるが、何れを見ても一片、十錢以上に上つて居るものは甚だ少い。見渡す處、死んだ魚の眼の色は濁り淀んで、腹の鱗は青白く褪せてしまひ、切身の血の色は光澤もなく冷切つて居るので、店頭の色彩が不快なばかりが、いかにも貧弱に見えま

す。西洋の肉賣る店の前を過ぎて、見るから恐ろしい眞赤な生血の滴りに膽を消した私は、全く其の反對、この冷い色ざめた魚肉が、多數の國民の血を養ふ唯一の原料であるのかと思ふと、一種云はれぬ悲愁を感せずには居られません。ましてや、夕方近くなると、坂下の曲角に、頬冠りをした爺が露店を出して魚の骨と腸ばかりを並べ、さア〜鯛の腸が安い、鯛の腸が安いと、皺枯聲で怒鳴る。其のまはりには、子を負つた例の女房共が群集して大聲に値段を争ふ。

大空は、砂で白くなつた瓦屋根の上に、秋の末の事ですから、夕陽の名残が赤とよりは寧不快な褐色に烈しく燃え立つて居るので、狭い往來の物の影は、其反對に夜の闇それよりも猶ほ強く黒く見えます。勤め先からの歸りと覺しい人通りが俄かに繁くなつて、其の中には一寸とした風采の紳

士もある、馬に乗つた軍人もある、人力車も通る。然し兩側の人家ではまだ灯一ツ黠さぬので、人通りは眞黒な影の動くばかり。其の間をば、棒片なぞ持つて悪戯盛りの子供が、目まぐるしく遊びまはつて居る。私は、勤歸りの洋服姿が、どうかすると、路傍の腸賣りの前に立止り、竹皮包みを下げて坂道をば、監獄署の裏通りの方へ上つて行くのを見ました。それが、何と云ふ譯もなく、貧しい日本の家庭の晩餐の有様を連想せしめます——

借屋の格子戸がガタ／＼云つて容易に開かない、切張りをした鼠色の障子にはまだランプの火も見えない。上框は眞暗だ。洋服の先生は骨て磨いた事もないゴム靴を脱捨て障子を開けて這入ると、三疊敷の窓の下で、身體のきかない老母が咳をして居る。赤子がギヤア／＼泣いて居る。細君は夜が來てから、初めて驚き、臺所の板の間に蛙の如くしゃがんで、今しも

狼狽してランプへ油をついで居る最中。夫の歸つた物音に、引窓からさす夕闇の光に、色のない顔を此方に振向け、油氣失せた底髪の後毛をぼう／＼させ、寒くもないのに水鼻を吸つて、薄ぼんやりした聲で、お歸んなさい。すると、夫は返事の代りに、今頃ランプの掃除をするのかと、家事の不始末不經濟を攻撃する。老母が夜具の中から匍ひ出して、何とか横口を入れる。夫、妻、何れの方へ身方をして同じ事、一場の争論に花が咲く。

其處へ、七八ツになる小兒が、喧嘩をして溝へ落ちたとやら、衣服を溝泥だらけにして泣きわめきながら歸つて來る。小言が其の方へ移る。やつとの事で、薄暗いランプの下に、糞豆に、香物に、葱と魚の骨の糞込みが並べられ、指の跡のついた御鉢が出る。一閑張の机を取巻いて家族が取交す晩餐の談話と云ふのは、今日の晝過ぎ何處そこの叔父さんが來て此の春の

母が病氣の樂代をどう云つたとか、實家の父が免職になつたとか、其れから續いて日常の家計談になる。家族の口はまるで飯を食ふのと、生活難を方針なく嘆き續ける爲めにしか出來て居ない。貧しくとも、貧しからずとも、つまりは同じ事でせう。かう云ふ人達には純粹な談話の趣味と云ふ事は解釋されないのです。言語は乃ち、相談と不平と續言と争論と、これより外には全く必要がないのです。

秋の光を味はうと、散歩するわが家の門前、監獄署の裏通りは、こんな有様でした。猶ほ此の上にも、私の心を痛い程に引締めるのは、時々坂道の真中で演せられる動物虐待の悲劇です、遠道を瘦馬に曳かした荷車が、二輛も三輛も引續いて、或時は米俵、或時は材木煉瓦など、重い荷物を坂

道の頂きなる監獄署の裏門内へと運び入れる。ところが意地悪く、門前の廣場は坂から續いて同じやうな傾斜をなし、濕つた柔い地面に車輪が食込んでしまふので、馬は疲れて到底も一息には曳込む事が出來ない。其れをば無理無體に、荒くれた馬子共は叱咤の聲激しく、落ちた棒片で會釋もなく打ち叩く。馬は激しく引立てられる手綱から、馬銜の痛みに堪られぬらしく、白い齒をかみ、鬣を逆立て、物凄じく眼を血走らせて遂にはがつく、砂利の上に前足を折つて倒れてしまふ事も度々です。狭い坂道は無論この騒ぎで往來止めとなり、通行人の大概は驚くどころか、面白半分口を開いて見て居ます。私は今日まで、日本の社會に、動物虐待の一件が、單に一部の基督教者に止まらず、一日半時とても猶豫すべからざる國民一般の餘儀ない問題にならない、この證據を目撃して、悲しませうか喜びませ

うか。私は唯だ、日本人は將來に於ても確かに最う一度、ロシアを征伐する事の出来る戦亂の民であると云ふ感を深くするだけです。御安心なさい。愛國の諸君よ。黄人の私をして、白人の黄禍論を信せしめる間は、君等は須く妻を叱咤し、子を虐げ、大白を擧げて而して帝國萬歳を三呼なさい。吾等が叫ぶ、新しき幽愁の詩人が理想の聲を心配するには、時代がまだ餘りに早過ぎませう。

私は次第々に門の外へ出る事を厭い、恐れるやうになりました。あゝ、私は矢張り縁側の硝子戸から、獨り靜に、移り行く秋の日光を眺めて居ませう。

秋はあはれ、秋は早や、暮れて行きます。かの、夏かと思ふ晝過ぎの烈しい日の光は、すつかり弱つて、空はどんよりといつでも曇つて居ます。

それは丁度、廣い畫室の磨硝子の天井でも見るやう、浮雲の引幕から屈折して落ちて来る薄明い光線は黄昏の如く軟いので、眩く照り輝く日の光では見る事味ふ事の出来ない物の陰影物の色彩までが、却つて鮮明に見透されるやうに思はれます。木の葉は何時か知らぬ間に散つてしまつて、梢はからりと明く、細い黒い枝が幾條となく、空の光の中に高く突立つて居る。後の黒い常盤木の間からは、四阿屋の葉屋根と、花畑に枯れ死した秋草の黄色が際立つて見えます。縁先の置石のかけには、黄金色の小菊が星のやうに咲き出しました。其の邊からすつと向うまで、何にも植えてない廣い庭の土には一面の青苔が夏よりも光澤よく天鵝絨の敷物を敷いて居る。二三羽の鶺鴒が、其の上をば長い尖つた尾を振りながら、苔の花を啄みつゝ歩いて居る。鼠色した其の羽の色と、石の上に置いた盆栽の槭の葉の紅葉

とが、如何に鮮かに、一面の光澤ある苔の青さに對照するでせう。
 風は少しもありません。行く秋の曇つた晝過ぎは、物の輪廓を没して、
 色彩ばかり浮立つ幻覺に、唯だどんよりと靜まり返つて居るのです。然し
 折々忽然として落ち残つた木の葉が、一度にはらくらくと落ちます。思ひ掛
 けないこの空氣の動搖は、さながら怪人の太い吐息を漏すがやうすると、
 常磐木の繁り、石の間なる菊の叢まで、庭中のありとあらゆる植物の葉は
 何とも云へぬ悲愁の響を傳へますが直ぐと又、もとの靜寂に立返つて、滑
 かな苔の上には再び下り來る鶴鴝の羽の色、菊の花、盆栽の紅葉。あゝ、
 夢の光、行く秋の薄曇り。
 閣下よ。私は昨日から、ヴェルレーヌが獄中吟サツジエスを讀んでをり
 ます。

おゝ、神よ。神は愛を以て吾を傷付け給へり。
 其の傷開きて未だ癒えず。
 おゝ、神よ。神は愛を以て吾を傷付け給へり。
 閣下よ。冬の來ぬ中是非一度、遊びに來て下さい。私は淋しい。

牡丹の容

客の丹牡

小れんと云ふ藝者と二人連、ふいとした其の場の機會で、本所の牡丹を
見にと兩國の橋だもとから早船に乗った。

五月も末だから牡丹はもう散つたかも知れない。實は昨日の晩、芝居で
計らず出會つたまゝ、代地の待合へ泊つて、今朝は早く歸るつもりを、
雨に止められたなり、其の晴れるのをば晝過ぎまで待つてゐたのだ。一日
小座敷に閉籠つてゐたに、往來へ出ると覺えず胸が開けて、人家の間
を河から吹き込む夕風が、何とも云へず爽に酔後の面を吹くのに、二人と
も自然と通りかゝる柳橋の欄干にもたれた。

次第に近く夏の氣候の、殊に雨上りの故でもあるか、日は今日から突然長くなり出したやうに思はれた。丁度寺院の天井に渦巻く狩野派の雲を見るやうな雨後の村雲が、空一面幾重にも層をなして動いて居る。其の間々に光澤のある濃い青空の色と、次第に薄れて行く夕炎の輝きが際立つて目を喜ばす。神田川を真直に上汐の黒く濃い緑色の水の面は、遠い明神の森に沈んだ夕陽を受けて、今だに磨いた硝子板のやうに光つてゐたが、荷船や小舟の殊更に輻輳する川口から、正面に開ける大河の面は眺望の遠いだけに色よりも唯一様に、夕暮の水の輝きばかりが目射る。角度の正しい石垣の兩側に瘦せた柳の繁りが、絶えず風にゆられて居ながら、如何にも懶く静に見えて、岸に近い藝者家の稽古三味線も今は途絶えた。あたりは一刻々々、雲の動くにつれて夕方ながらに却つて明くなり往來の人の顔や

衣服の縞がはつきり見えるばかりか、雨に塵を洗はれた後の街全體が、如何にも清らかに落ち付いて心持よく見える。湯歸りの女が化粧道具を手にして行交ひざまに話して行く。其の眞白な襟筋が驚くほど美しい。早くも蝙蝠の飛出したのを素早い子供が見付けて、追掛けて居る。近くに絶えざる電車の響。遠くに汽船の笛の音が長く尾を引いて消えたが、すると川口へ大きな屋根を突出した龜清の二階で幾挺の三絃が一度に調子を合して鳴り出した。濡れた雨のまだ乾かない柳光亭の板塀の外には蹴込に紅い毛皮を敷いた漆塗の新しい人力車が、二臺ばかり置いてあつた。黒い紋附の襦袢様の褌を取つた藝者一人と、目覚るばかりな友禪染の半玉が、早足に柳の垂れた門口へ這入つて行く。其れをば通りがりのものが珍らしさうに振返つて見て居た。

「行きませう。」

小れんが云ふので自分は大通を兩國の方へ歩き出した。

「すぐ家へ歸るかい。車をさう云はうか。」

小れんは軽く首を振つたまゝ、すん／＼歩いて行く。

自分は大通から大川へ廣る夕方の空を仰げるだけ廣く仰いだ。橋の手前は近所の飲食店から物煮る匂の立迷ふ中を、電車の行交ひ、其れを待つ人、橋を渡る荷車などで非常に混雜して居る。ふいと其の瞬間、自分は女を待つて待合から出て來た自分と此のやうに休まず活動して居る世間との間には、全く交通しない隔離があつて、自分と世間とは別々の運命に支配されて別々の方向に動いて行くやうな心持を深く感じた。いつも日の暮れに感ずる心の静まりが重なる原因であらうけれど、譯もなく力抜けがして心が落

付いてしまつて、其れで何處にか云ひ得ない幽愁が蟠つて居る。別にわかれを惜しむと云ふでもない。一日の遊蕩を悔悟するでもない。水の流に感動するでもない。唯だ、都會と云ふものが、都會に生れた人にも與へる人工の歡樂を、自分は今日までに見盡した其の夢のさまざまを一時に思返すやうな氣がしたのだ。

「あぶないよ。」

手を引いてやつて電車の線路を横切つたが、すると小れんが河端に立た書札の文字を、

「早船、四ツ目の牡丹……大人四錢。」と讀んだ。

「行つて見やうか。」

女はいつもにない若々しい元氣な聲を出して、

「え、行きませう。まだ私一度も行つた事がないのよ。」

さう云ふわけで、自分等二人は其れなり石垣へ掛けた板の歩みを渡り、古い傳馬船を傳つて、薄べりを敷いた荷足舟へ乗つたのである。

メリヤスの着古したシャツの上に十文字に腹掛を締めた二十二三の若い船頭、並んで繋いだ隣りの空船の船頭と話をして居たのが、自分達の乗つたのに元氣を得て、脊を圓くして躊躇んで居たのを急に立上つて、まだ片手には吹ひかけの煙管を持つたまう、

「さア出ますよ、本所の牡丹行、出ますよ、出ますよ。」と水の上から見上げると、石垣の向うに足ばかりしか見えない往來の人をば大聲で呼びつづけた。

自分はこの分で待たせられたら折角向うへ着く時分には日が暮れ果て、

しまはう、二人買切りにして二十五錢……此の一聲で船頭はすぐと櫓を水に入れたばかりか、

「旦那、いゝ氣候になりました。」と云つて薄べりの上へ煙草盆まで持ち出してくれた。

丁度夕潮の満ちた頃、河水の流れはゆるやかで、小舟は船頭が若い腕の力で前後に櫓を押す其の力だけに軽く揺れながら進んで行く。子供の時分乳母がよく、ギョ／＼お舟はどうこ、と云つて揺つて呉れたやうな何となく遠い懐しい、現代を離れた一種の軟い感情が浮んで来る。

電車と車の烈しく往來する中をほんやり鐵の欄干にもたれて通行の人が幾個も、箱を浮したやうな棧橋へ、絶え間なく着いては出る河蒸汽船、其れから上り下りする人の混雑を眺めて居る。日本橋の方の河岸は次第に遠

八
 濱町の方まで見通されるやうになると、橋向うの屋根の上に、夜は電燈のつく廣告の拙い畫面がはつきり見え出す。今だに夕陽を遮つて黒い雲の動いて居る大空は、岸の低い川下の方に蔽ひ冠さつて、眼のとゞく其のはづれに木造の新大橋が匂ふやうに水を渡り、其の向うには製造所の煙筒が黒い煤煙を長く棚曳して居る。丁度河の真中で、濱町から一ツ目へ通ふ渡船と船首を揃へた。淺黄木綿の大きな四角な包を脊負つた番頭らしい男と、裕の胸を腹當の見える程に引きあけて、帽子も冠らぬ遊人らしい若い好い男が乗つて居た。其の時通り過ぎる蒸汽船の横波で、自分等の早船も、底の平い渡船は猶更に烈しく左右に搖れる。横波は河面を滑つて行つて、土塚の中に恐しく若葉の茂つた濱町の石垣から往來までも匂上りさうに白い泡を立てたのが能く見えた。早船は船首の尖つた漁船の事で、横波でゆら

れる最中に渡船より先になつて、鑿川の入口に近付く。以前よく長唄の會なぞの開かれた井生村樓の時分とは河岸の模様がすっかり變つて、突出した空地へ二階立の小料理屋らしい家が新しく出来た。待合かも知れない。二階の欄干に蒲團が干してあつて、银杏返の女が二人水の流れを見て居た。すると、船頭が突然大聲で、
 「今晚、いゝお天氣で。」と叫んだ。
 女は返事するどころか愉るゝ如く引込んでしまふ。
 「何だい。」と自分が大きくと船頭は嘲つた調子で、「旦那、三軒とも淫賣屋でさ。いゝとこへ巢をくひましたよ。」
 小れんは厭な顔をして自分の膝をつき、「あなた、煙草頂戴よ。」
 ぐツと一ツ力強い取梶で舟は石垣の下を廻つて堀割へ這入つたが、直ぐ

一〇
 に一ノ橋と木札を打つた橋をくぐる。狭からぬ堀割の岸邊には、堀割の水のついで、限り、さまざまの形して、さまざまの荷を積んだ荷船が幾艘となく繋がれて居る。其日の仕事は丁度終つた處で、どの船でも船頭は舷へしやがんで煙草をふかしながら空を見て居る。川水で汗を拭いて居るのもある。女房は兒を脊負つたまゝで、船板の上に置いた籠に火を焚き、飯櫃を洗ひなぞしてゐる。重に石炭殻を焚くので煙の匂が強く立迷ひ、赤い煙がちら／＼川水に映る。小れんは珍しさうに其れを眺めて、

「船の中に寝るんでせうか。」

「さうぞ。」

「おつたわねえ、浮世離れて。」と自分の顔に眼を移した。

「いけないよ。又思ひ出しちゃ。出来ないものは仕様がななさ。」

さう云つたけれど然し自分も妙に悲しかつた。自分は小れんと二人で一時築地へ家を持つた事もある。然し半年ほどで相談の上女は又元の藝者になつた。

「あなた、もう一度私と家を持つて見ない事……いやですか。」

「いやな事はない。だけれども矢張り駄目だよ。先見たやうに直き飽きてしまふよ。」

「さうねえ、でも私、藝者して居てもつまらないから。」

「何をしても、もうつまらないんだよ。女房になつて暮しの苦勞なんかしたら猶つまらない。お前が三十、僕が三十五六になるまで、もう三四年は矢張若い氣で浮いて暮した方がと云ふので、お前も承知の上で彼處の看板を借りて見たんぢやないか。」

「それアさうですけれど、どうかすると家を持つてるときより却つてあなたにも御厄介をかけるから、私矢張りもう内儀さんでくすぶつて仕舞はうかと思つたの。」

「其れも悪くはないがね、一度道樂したものには、茶屋小屋の勘定は惜しくないが、蟻が物を喰ふやうに一秒一分休みなしにやつて来る生活の苦勞と來たら實際馬鹿々々しくつて出來たもんぢやないよ。お前だつて、何々さんの總見だとか、何々さんのお弘めだとか、どこそこの付届だなんて云ふと、随分よく氣をつけるが、やれ、水道部の届書だとか、やれ認印だとか云ふと、到底うるさくつて閉口しちまつたンぢや無いか。」

「だから、私達は何時まで經つたつて夫婦になれッこ無いわね。」

「さう云つたものでもないさ。つまり、もう少し年をとればいゝのさ。惚

れたくも惚れられたくも無くなつて、世の中の樂しみに未練がなくなればいゝのだ。お互に浮氣でもされやしないかと心配したり苦勞したり厭味を云つたりする餘地があるから、顔も見たくなくなる、戀しくもなるんだアね、だから、二人とも夫婦なんぞになつてもならないでも、何うでもよくなれば自然と沈着て一緒になつて居られるさ。」

「つまらない世の中ね。」

「あゝつまらないさ。」

電車の通る二ノ橋を越してからは、何處まで行つても眞直な河筋の、一度び木造の低い橋をくゞりかけると、其のアーチが八重になつて直ぐ又行手に、同じやうな橋が見え、何れの欄干にも近所の子供が蟻のやうに集つて騒いで居る。橋の上のみならず、水に添ふ物揚場のやうな空地には矢張

り悪戯盛りの子供が群集り、其の中には男に劣らぬ女の子までが加つて、
両方の岸から、負けず劣らず、

向う河岸の

金太郎

頭が三寸

長いな……

と聲のかぎりに喚き合ふ其の金切聲は、水を渡り岸に傳つて、後から追
掛けて来て自分等が舟の進みを急すやうに思はれた。物煮る荷船の焰の色
が幾分か赤さを増したやうな氣がするだけ、風の絶えた夕暮は沈み返つて、
水に映る倉庫の白い壁の色が鮮かに澄む。屋根の形に美しく薪を積上げた
物陰はもう薄暗い。橋の袂の處々に竹屋の竹竿が幾束にもなつて立掛けて

あるのが、夕方の空に對して如何にも高く黒く鋭く聳えて見える。然し何
處まで行つても眺望は少しの變化をも示さないで、最初は珍らしかつた
舟にゆられる心持も今では倦み疲れて薄べりの腰が痛くなつた。

「この川、何處まで續いてるんでせう。」

「龜井戸まで……。」

「牡丹までまだ餘程あつて……。」

「あれが三ノ橋だらう。もう大した事はあるまい。」

自分じぶんは小れんと共にともに吠をあぐびか噛みしめた。

「どうだね。もう役者やくしゃなんぞ買つて見る氣はないか。」

「馬鹿々々しくつて。先からお金貰つたつて眞平よ。先の中は人から冷笑
かされたり何かすると、内心嬉しくつて堪らなかつたけれど、この頃ちや

時たま、あなたの事なんぞ云ひ出されたつて、へえさうですかとばかりでね、もう可笑しくも面白くも何ともないわ。」

「全くさ。人の噂なんぞ珍しくもない。然し其れで居て、いざ一緒になつて見ると矢張駄目なんだね。」

「心中でもしちまいたいわね、寧ろ……。」

「出来たら、其れもいゝね。」

「世間ぢや何て云ふでせう。」

「いろくゝに勝手な事を云ふだらう。然し三日たゝない中に忘れてしまふわ。」

「ぢや、つまらないわ。」

「つまらないさ。」

二人で又呟をした。

「だから、其様事考へるよりいつそ男も色も何にもなしで暮すやうに量見をきめた方が、餘程利口かも知れないせ。」

「あなた見たやうに、道樂しぬいた人なら、女なしでも暮せるでせうね、考へ次第で。」

「お前はどうか。役者も買ひ飽きたと云つたぢやないか。」

「役者はいやさ。役者と亭主とは違つてよ。」

「ぢや、唯だ男として置かう。」

「それアね、皆から捨てられちまつてさ。外に誰れも此れツて云ふ人が見當らなければ、却て氣樂に獨りで暮せるでせうよ。だけれども世間の人が面白相に泣いたり笑つたりしてゐるのを見ると、ほんとうに癪だわねえ。」

あなた、田舎で暮して見なくつて、どこか遠い山の中で、世間離れて……」
 「それもほんの當分だ。箱根にだつて一週間と我慢が出来なかつたか
 ら……。」

「仕様が無いねえ、ぢれツたい。」

船頭が、「旦那」と聲をかけて、荷船の間に浮べた傳馬船に早船を着けた。
 河岸は倉庫の間が少しばかり物揚場になつて居て、其の向うに人力車の溜
 り場が見えた。上ると狭い往來を隔て、直様、建仁寺垣の門口に牡丹園と
 書いた札がかけてある。

唯さへ濕氣の多い場末の事で、往來は随分泥濘つて居る。自分は女と二
 人で水溜りをよけながら門を這入り、大きな古木の鉢物を置き並べた敷石
 を傳つて行くと、雨を避ける低い葺簷の天井に、夕暮の光を遮つて奥庭一

面は驚く程眞暗であつた。丁度二三人の女中が數多く釣した石油ランプに
 火をつけ廻つて居るところで、列をなして植付けた牡丹の花は、鈍く黄い
 灯の光の達く處だけ朦朧として、僅に夕闇の影の中に浮出して來る。然し
 大方は散つてしまつて、然うでないものも憂はしく色が褪めて、葎ばかり
 が黒く大きく開いて居る。強い日の光や爽かな風に曝して置いたなら疾に
 潔く散つて了つたものを、人の力で無理やりに今日までの盛りを保つた
 深い疲労と倦怠の情は、庭中の衰へた花の一輪づつから湧出して、丁度其
 れに能く似た自分等二人の心に流れ通ふやうな氣がした。佇んで見て居る
 と風もなければ歩く人の足音もないのに、彼方の花も此方の花も、云合し
 たやうに重さうな花瓣を絶え間なく落す。花瓣は黒い葉の面に止まるのも
 あれば、其處はもうランプの光の達かない葉蔭の土に滑り込んで了ふのも

ある。時間が遅いのと時節が過ぎたのとで、見物の人は一人も這入つて来ない。外の河岸通りでは依然として子供が囃す唄の聲が、折々は人数の夥だしく増えるらしく高まつて聞える。

「本所の牡丹てたつた此れだけの事なの。」

「名物に甘いものなしさ。」

「歸りませう。」

「あゝ。歸らう。」

花より雨に

鐵の橋や堀割の水からは遠い山の手古庭に、春の花は支那の詩人が春風二十四番と數へたやう梅、連翹、桃、木南、藤、山吹、牡丹、芍薬と順々に咲いては散つて行つた。

明い日の光の中に燃えては消えて行くさまぐな色彩の變轉は、黙つて淋しく打眺める自分の胸に、悲しい戀物語の極めて美しい一章々々を読み行くやうな軟かい悲哀を傳へる。

われの悲しむは過ぎ行く今年の春の爲めではない、又來べき翌年の春の爲めと歌つたのは誰れであつたか忘れてしまつたが、春はわが身に取つて

異なる秋に過ぎないと云つたのは、南國の人の常として特更に秋を好むジャン・モレアスである。

二

空は日毎に青く澄んで、よく花見歸りの午後から突然暴風になるやうな氣候の激變は全くなくなつた。日の光は次第に強くなつて、赤味の多い橙色の夕日は、もう黄昏も過ぎ去る頃かと思ふ時分まで、案外長く何時までも、高い檜の梢の半面や、又は低く突出た楓の枝先なぞに残つて居て、或は何處から差込んで來るのかとも知れず、植込の奥深い土の上にはばら／＼な斑點を描いて居る事もあつた。さう云ふ夕方に空を仰ぐと、冬には決して見られない薄鼠色の鱗雲が名残の夕日に染められたなり動かすに、空一ぱいに浮いてゐて、草の葉をも戦がせぬ軽い風が、自然と食後の人をば星

の沓えそめる頃まで、遠く郊外の方へと連れて行く。

何處を見ても若葉の緑は洪水のやうに漲り溢れて、日の光に照されるその色の強さは、閉めた座敷の障子にまで反映するほどなので、午後の縁先なぞに向ひ合つて話をする若い女の白い顔をば、色電氣の中に舞ふ舞姫のやうに染め出す。どんより曇つた日には緑の色は却つて鮮かに澄渡つて、沈思につかれた人の神経には、軟い木の葉の緑の色からは一種云ひがたい優しい音響が發するやうな心持をさせる事さへあつた。

古庭は非常に暗く狭くなつた。

繁つた木立を其の枝か蔽ふ木の葉の重さに堪へぬやうな憂はしい苦しい様子を見せるばかりでなく、壓迫の苦惱は目に見えぬ空氣の中に漲つてゐる

る。西からとも東からとも殆ど方向の定まらぬ風が水でも投捨てるやうに
 突然吹き下りて突然消えると、こんもりした暗い樹木は蛇が鱗を動かすやう
 な氣味悪い波動をば俯向いた木の葉の茂りから茂りへと傳へる。折々雨が
 降つて來ても、庭の地面は冬のやうに直様濡れはせず、濡れると却て土地
 の熱氣を吐き出すやうに一體の氣候を厭に蒸暑くさせる。伸び切つた若葉
 の尖つた葉末に雨の雫の滴りもせず留つて居るのを、曇りながらに何處
 か知らバツと明い空の光が寶石のやうに麗しく輝かす。石に蒸す青苔にも
 樹の根元の雑草にも小さな花が咲いて植込の陰には、雨を避ける蚊の群が
 雨の絲と同じやうに細かく動く。
 雲が流れて強い日光が照り初めると直ぐに苺が熟した。枇杷の實が次第
 に色付いて、無花果の葉裏にはまう鳩の卵ほどの實がなつて居た。最早や庭

四

中何處を見ても花と云ふものは一つもない日當りの悪い木立の奥に氣味
 悪く青白い紫陽花が咲きかけたばかりで、青かつた木葉の今は恐しく黒ず
 んで來たのが、云ふべからず不快に見えてならぬ。古庭はますます暗くな
 づて行く。

或日の夕方近所の子供が裏庭の垣根を破して、長い竹竿で青梅の實を叩
 き落して逃て行つた。別に不消化なものを食べたと云ふでもないのに、突
 然夜半に腹痛を覺えて自分はいと眼をさました事がある其の時戸外には
 餘程前から雨が降つて見えて、点滴の響のみが、夜風が屋根の上にと梢か
 ら顛ひ落すまばらな雫の音をも耳にした。梅雨はこんな風に何時から降出
 したともなく降り出して、何時止むとも知らず引き續く……

五

家中の障子を盡く明く放して、空の青さと木葉の緑を眺めて、午後の暑さに草苺や櫻の實を貪つた時には、風に動く木の葉の乾いた響が殊更に、晴れた夏と云ふ快い感じを起させたが、今では、もう降りつゞく雨の日は木葉一つ動かすに沈み返つて、普段は朝から聞えるさまざまの街の物音、物賣りの聲も全く途絶えた。午時の十時頃が丁度夕方のやうに薄暗い時、いつもは他の物音に遮ぎられて聞えない遠い寺の時の鐘が、音波の進みを目に見せるやうに響いて来る。すると、此の寺の鐘は冬の午後に能く聞馴れた響なので、自分の胸には冬に感ずる冬の悲しみが時ならず呼び起されて世の中には歡樂も色彩も何にもないやうな氣がして、取返しつかない後悔が倦怠の世界に獨で跋扈するのだ。

筆の軸は心地悪くねばつて、詩集の表紙に黴が生る。壁と押入からは濕氣の臭が湧出して、手箱の底に秘藏する昔の戀人の手紙をば蟲が喰ふ。蛭蝮の匂ふ縁側に悲しい淋しい墓の歌が聞える暮方近く、濕つて寒いので室の障子は一枚も開けたくはないけれど、餘りの薄暗さに折々は縁先に出て佇んで見ると、雨の絲は高い空から庭中の樹木を蜘蛛の網のやうに根氣よく包んで居る。ヴェルレーヌが、

II pleurs dans mon coeur

Comme il pleut sur la ville.....

都に雨の降る如く

わが心にも雨が降る……

と歌つたやうな音樂的な雨ではない。あの詩は響のつよい秋の時雨を思は

せるが、現代に最も悲しい詩人と云はれた白耳義のローダンバックが、

Comme les pleurs muets des choses disparues,
Comme les pleurs tombant de l'oeil fermé des morts……

涙びしもの、聲なき涙の如く
死せし人の閉ざれし眼より落つ涙の如く……

と色も音もない彼の國の冬の雨を歌つた詞は、今最も適切に自分の記憶に
呼返される。

Notre âme, elle n'est plus qu'un haillon sans couleurs,
Comme un drapeau mouillé qui pend contre sa hampe.

人の心は旗竿より濡れて下りし
其の旗の色とてもなき襤褸なりけり

と云はれた通り、動きもせぬ、閃きもせぬ、人の心は唯々腐つて行くばかりである。

然し其等近世の詩人に取つては悲愁苦惱は屢々何物にも換へがたい一種の快感を齎す事がある。梅雨の時節には他の時節に見られない特別の恍惚を自分は見出す。それは絶望した心が美しいものゝ代りに恐しく醜いものを要求し、自分から自分の感情に復讐を企てやうとする時で、晴れた日には行く事のない場末の貧しい町や露地裏や遊廓なぞに却て散歩の足を向けらる。そして雨にぬれた汚い人家の燈火を眺めると、何處にか酒呑の亭主に撲られて泣く女房の聲や、繼母に苛まれる孤兒の悲鳴でも聞きはせぬかと恐れるよりは聞いたなら何様心持がするだらうと一心に耳を聳てる。或夜

非常に晩く、自分は重たい唐傘を肩にして眞暗な山の手の横町を歸つて來る時、迷つた犬の子が哀れに鼻を鳴して人の後に尾いて來るを見たが、他分其の犬であらう。自分は家へ這入つて寢床に就いてから、夜中遠くの方で鳴いては止み、止んでは又鳴く犬の子の聲をば、これも夜中斷えては續く雨滴の音の中に聞いた……………

雨は折々降り止む。すると空は無論隙間なく曇りきつて居ながら、日が照るのかと思ふ程に明るなつて、庭中の樹木は茂りの輕重に従つて陰影の濃淡を鮮かにし、凡ての物の色が黄昏の時のやうに浮き立つて來るので、感じ易い心は直様秋の黄昏に我れ知らず耽けるやうな果しのない夢想に引き入れられる。薄曇りの空の光に日頃は黒い緑の木葉が一帶に秋の如く薄

く黄ばんで了つて、庭のかなたに溜つた池のやうに水の面は眩しいばかり澄渡つて、もう大分紫の色濃くなつた紫陽花の反映して居るのが如何にも美しい。少しの風もないのに接骨木の生垣からは赤くなつた去年の古葉が雨の雫と共に頻りと落ちる。

雀の聲が俄にかしましく聞え出すと、それが雨の晴れ間に生返る生活の音楽のプレリユードで、此の季節に新しく聞く苗賣りの長く節をつけて歌ふ聲、續いて魯西亞のパン賣り、其の呼聲を珍しさうに眞似する子供の叫びが彼方から彼方へと移つて行くので、パン賣りは横町を遠くへと曲つて行つた事が能くわかつた。冬にも春にも日頃いつでも聞く街の聲は一時に近く遠く聞え出したが、する程もなく、再び耳元近く、ブリキ製の樋竹に屋根から傳はり落ちる雨滴れの響に、あゝ、自分は始めて目には見えない

雨あめが空そらの晴はれさうに明あかるくなつて居ゐるにも係かゝらず、いつの間まにかまた降くだ出してゐたのに心こころ付つくのであつた。

枇杷びはの實みは熟じやくしきつて地ちに落おちて腐くさつた。厠かはやに行く縁えん先に南天なんてんの木きがある。其その花はなはいかなる暗くらい雨あめの日ひにも雪ゆきのやうに白しろく咲さいて、房ふさのやうに下さつてゐる。自分じぶんは幼ちひさい時とき、この花はなの散ちりつくすまで雨あめは決けつして晴はれな
いと語かたつた乳母うはの詞ことばを思おもひ出だした……………

狐

小庭を走る落葉の響、障子をゆする風の音。

私は冬の書齋の午過ぎ。幾年か昔に戀人とわかれた秋の野の夕暮を思出すやうな薄暗い光の窓に、ひとり淋しく火鉢にもたれてツルゲネーフの傳記を讀んでゐた。

ツルゲネーフはまだ物心もつかぬ子供の時分に、樹木のおそろしく生茂つた父が屋敷の庭をさまよつて、或る夏の夕方に、雑草の多い古池のほとり、蛇と蛙の痛しく噛み合つてゐる有様を見て、善悪の判断さへつかない

い幼心に、早くも神の慈悲心を疑つた……と讀んで行く中に、私は何時となく理由なく、私の生れた小石川金富町の父が屋敷の、おそろしい古庭のさまを思ひ浮べた。もう三十年の昔、小日向水道町に水道の水が、露草の間を野川の如くに流れてゐた時分の事である。

水戸の御家人や旗本の空屋敷が其處此處に賣物となつてゐたのをば、維新の革命があつて程もなく、新しい時代に乗じた私の父は空屋敷三軒ほどの地所を一まとめに買ひ占め、古びた庭園や木立をそのまゝに廣い邸宅を新築した。私の生れた時には其の新しい家の床柱にも、つやぶきんの色の稍さびて來た頃で。されば昔のまゝなる庭の石には苔いよ／＼深く、樹木の陰はいよ／＼暗く、その最も暗い木立の片隅の奥深いところには、昔の屋敷跡の名残だといふ古井戸が二ツもあつた。その中の一ツは出入りの安

吉といふ植木屋が毎年々々手入の松の枯葉、杉の折枝、櫻の落葉、あらゆる庭の塵埃を投げ込み、私が生れぬ前から五六年もかゝつて漸くに埋め得たと云ふ事だ。丁度四歳の初冬の或る夕方、私は松や蘇鐵や芭蕉なぞに其の年の霜よけを爲し終へた植木屋の安が、一面に白く乾いた茸の黴び着いてゐる井戸側を取破してゐるのを見た。これも恐ろし數ある記念の一つである。蟻、やすで、むかで、げじぐ、みゝず、小蛇、地蟲、はさみ蟲、冬の住家に眠つて居たさま／＼な蟲けらは、朽ちた井戸側の間から、ぞろぞろ、ぬる／＼、うごめき出し、木枯の寒い風にのたうち廻つて、その場に生白い腹を見せながら斃死つてしまふのも多かつた。安は連れて來た職人と二人して、鉈で割つた井戸側へ、その日の落葉枯枝を集めて火をつけ高等でのたうち廻つて匍出す蛇、蟲けらを搔寄せて燃した。パチリ／＼音

がする。焔はなくて、濕つた白い烟ばかりが、何とも云へぬ悪臭を放ちながら、高い老樹の梢の間に立昇る。老樹の梢には物すごく鳴る木枯が、驚くばかり早く、庭一帯に暗い夜を吹下した。見えない屋敷の方で、遠く消魂しく私を呼ぶ乳母の聲。私は急に泣出し、安に手を引かれて、やつと家へ歸つた事がある。

安は埋めた古井戸の上をば奇麗に地ならしをしたが、五月雨、夕立、二百十日と、大雨の降る時々地面が一尺二尺も凹むので、其の後は繩を引いて人の近かぬやう。私は殊更父母から厳しく云付けられた事を覚えて居る。今一つ残つて居る古井戸はこれこそ私が忘れやうとしても忘られぬ最も恐ろしい當時の記念である。井戸は非常に深いさうで、流石の安も埋めやうとは試みなかつた。現在は如何なる人の邸宅になつて居るか知らぬけれど

あの井戸ばかりは依然として、古い／＼柳の老木と共に、あの庭の片隅に残つて居るであらうと思ふ。

井戸の後は一帯に、崇りを恐れる神殿の周囲を見るやう、冬でも夏でも眞黒に静に立つて居る杉の茂りが、一層其の邊を氣味わるくして居た。杉の茂りの後は忍返しをつけた黒板塀で、外なる一方は人通のない金剛寺坂上の往來、一方はその中取拂ひになつて呉れ、ばと、父が絶えず憎んで居る貧民窟である。もと／＼分れ／＼の小屋敷を一つに買占めた事として、今では同じ構内にはなつて居るが、古井戸のある一隅は、住宅の築かれた地所からは一段坂地で低くなり、家人からは全く忘れられた崖下の空地である。母はなせ用もない、あんな地面を買つたのかと、よく父に話をして居られた事がある。すると父は崖下へ貸長屋でも建てられて、汚い瓦屋根だ

の、日に干す洗濯物など見せつけられては困る。買占めて空庭にして置けば閑静でよいと云つて居られた。父にはどうして、風に吠え、雨に泣き、夜を包む老樹の姿が恐くないのであらう。角張つた父の顔が、時としては恐しい松の瘤よりも猶空恐しく思はれた事があつた。

或る夜、屋敷へ盗棒が這入つて、母の小袖四五點を盗んで行つた。翌朝出入の齋の者や、大工の棟梁、警察署からの出張員が来て、父が居間の縁側づたひに土足の跡を検査して行くと、丁度冬の最中、庭一面の霜柱を踏み碎いた足痕で、盗賊は古井戸の後の黒板塀から邸内に忍入つたものと判明した。古井戸の前には見るから汚らしい古手拭が落ちて居た。私は昔水戸家へ出入りしたとか云ふ頭の清五郎に手を引かれて、生れて始めて、この古庭の片隅、古井戸のほとりを歩いたのであつた。古井戸の傍に一株の

柳がある。半ば朽ちた其幹は黒い洞穴にうがたれ、枯れた數條の枝の悲しげに垂れ下つた有様。それを見たいけれども、私は云はれぬ氣味悪さに打たれて、埋めたくも埋められぬと云ふ深く井戸の底を覗いて見やうなぞとは、思ひも寄らぬ事であつた。

敢て私のみではない。盗難のあつた其れ以來、崖下の庭、古井戸の附近は、父を除いて一家中の畏懼恐怖の中心點になつた。丁度、西南戦争の後程もなく、世の中は、謀反人だの、刺客だの、強盗だのと、殺伐殘忍の話ばかり、少しく門構の大きい地位ある人の屋敷や、土藏の嚴めしい商家の縁の下からは、夜陰に主人の寢息を伺つて、いつ脅迫暗殺の白刃が壘を貫いて閃き出るか計られぬと云ふやうな暗澹極まる疑念が、何處となしに時代の空氣の中に漂つて居た頃で、私の家では、父とも母とも、誰れの發議

とも知らず、出入の爲の者に夜廻りをさせるやうにした。乳母の懐に抱かれて寝る大寒の夜なく、私は夜廻の拍子木の、如何に鋭く、如何に冴えて、寢静つた家中に遠く、響き渡るのを聞いたであらう。あゝ、夜ほど恐いもの、厭なものはない。三時の茶菓子に、安藤坂の紅谷の最中を食べてから、母上を相手に、飯事の遊びをするかせぬ中、障子に映る黄い夕陽の影の見る／＼消えて、西風の音、樹木に響き、座敷の床間の黒い壁が、真先に暗くなつて行く。母さんお手水にと立つて障子を明けると、夕闇の庭ついき、崖の下はもう眞暗である。私は屋敷中で一番早く夜になるのは、古井戸のある彼の崖下……否、夜は古井戸の其底から湧出るのではないかと云ふ感じが、久しい後まで私の心を去らなかつた。

私は小學校へ行くほどの年齢になつても、傳通院の縁日で、からくりの

晝看板に見る皿屋敷のお菊殺し、乳母が讀んで居る四谷怪談の繪草紙などに、古井戸ばかりか、丁度其の傍にある朽ちかけた柳の老木が、深い自然の約束となつて、夢にまで私をおびへさせた事が幾度だか知れなかつた。恐いものは見たい。恐る／＼訊く私が知識の若芽を乳母はいろ／＼な迷信の鉄で切摘んだ。父親は云ふ事を聴かないと、家を追出して古井戸の柳へ縛りつけるぞと怒鳴つて、爛熳たる兒童の天真を損ふ事をば願ひなかつた。あゝ、恐しい幼少の記念。十歳を越えて猶、夜中一人で、厠に行く事の出來なかつたのは、その時代に育てられた人の兒の、敢て私ばかりと云ふではあるまい。

父は内閣を「太政官」大臣を「卿」と稱した頃の官吏の一人であつた。一時、頻と馬術に熱心して居られたが、それも何時しか中止になつて、後

四五年、ふと大弓を初められた。毎朝役所へ出勤する前、崖の中腹に的を置いて古井戸の柳を脊にして、涼しい夏の朝風に弓弦を鳴すを例としたが間もなく秋が来て、朝寒の或日、片肌脱の父は弓を手にした儘、あはたしく崖の小道を馳上つて来て、皺枯れた大聲に、

「田崎々々！庭に狐が居る。早く来い。」と、どなられた。

田崎と云ふのは、父と同郷の誼みで、つい此の間から學僕に住込んだ十六七の少年である。然し、私には、如何にも強さうなその體格と、肩を怒らして大聲に話す漢語交りの物云ひとで、立派な大人のやうに思はれた。

「先生、何の御用で御座います。」

「怪しからん、庭に狐が居る、乃公が弓を引いた響に、崖の熊笹の中から驚いて飛出した。あの邊に穴があるに違ひない。」

田崎と抱車夫の喜助と父との三人。崖を下りて生茂つた熊笹の間を捜したが、早くも出勤の刻限になつた。

「田崎、貴様、よく捜して置いて呉れ。」

「はあ、承知しました。」

玄關に平伏した田崎は、父の車が砂利を轆つて表門を出るや否や、小倉袴の股立高く取つて、天秤棒を手に庭へと出た。其の時分の書生のさまなぞ、今から考へると、幕府の當時と同様、可笑しい程主従の差別のついて居た事が、一舉一動思出される。

何事にも極く碎けて、優しい母上は田崎の様子を見て、

「あぶないよ、お前。喰ひつかれでもするといけないから、お止しなさい」

「奥様、堂々たる男子が狐一匹。知れたものです。先生のお歸りまでに、

きつと撲殺してお目にかけます。」

田崎は例の如く肩を怒らして力味返つた。此の人は其後陸軍士官となり日清戦争の時、血氣の戦死を遂げた位であつたから、殺戮には天性の興味を持つて居たのであらう。日頃田崎と仲のよくない御飯焚のお悦は、田舎出の迷信家で、顔の色を變へてまで、お狐さまを殺すはお家の爲めに不吉である事を説き、田崎は主命の尊さ、御飯焚風情の嘴を入れる處でないと言の下の下に排斥して仕舞つた。お悦は眞赤な頬をふくらし乳母も共々、私に向つて、狐つき、狐の祟り、狐の人を化す事、傳通院裏の澤藏稻荷の靈験なぞ、こまかくと話して聞かせるので、私は其頃よく人の云ふこつくり様の占ひなぞ思合せて、半ばは田崎の勇に組して、一緒に狐退治に行きたいやうにも思ひ、半ばは世にさう云ふ神秘もあるのか知らず疑ひもしたの

であつた。

午飯が出来たと人から呼ばれる頃まで、庭中の熊笹、竹藪の間を歩き廻つて居た田崎は、空しく向脛をば笹や茨で血だらけに搔割き、頭から顔中を蛛の巣だらけにしたばかりで、狐の穴らしいものさへ見付け得ずに歸つて来た。夕方、父親について、淀井と云ふ爺さんがやつて来た。それは殆ど毎日のやう、父には晩酌園恭のお相手、私には其頃出来た鐵道馬車の繪なぞをかき、母には又、海老藏や田之助の話をして、夜も更渡るまでの長尻に下女を泣かした父が役所の下役、内證で金貨をもして居る屬官である。父はこの淀井を伴ひ、田崎が先に提灯をつけて、蟲の音の雨かと疑はれる夜更の庭をば、二度まで巡回された。私は秋の夜の、如何に冷かに、如何に清く、如何に蒼いものかを知つたのも、生れて此の夜が初めていあ

つた。

母上は其の夜の夜半、夢ではなく、確かにこんくと云ふ啼き聲を聞いたとの話。下女は日が暮れたと云つたら、どんな用事があつても、家の外へは一步も踏出さなくなつた。忠義一圖の御飯焚お悦は、お家に不吉の兆と信じて夜明に井戸の水を浴びて、不動様を念じた爲めに風邪を引いた。田崎が事の次第を聞付けて父に密告したので、お悦は可哀さうに、馬鹿をするにも程があるとして、嚴しいお小言を頂戴した始末。私の乳母は母上と相談して、當らず觸らず、出入りの魚屋「いろは」から犬を貰つて伺ひ、猶時々油揚げをば、崖の熊笹の中へ捨て、置いた。

父親は例の如くに毎朝早く、日に増す寒さをも厭はず、裏庭の古井戸に出て、大弓を引いて居られたが、もう二度と狐を見る機会がなかつた。何

處から迷込んだとも知れぬ瘦せた野良犬の、油揚げを食つて居る處を、家の飼犬が烈しく噛み付いて、其の耳を喰切つた事がある。一家中、何時とはなく、狐は何處へか逃げてしまつた。狐ではなく、あれも矢張り野良犬であつたのかも知れぬと、自然に安堵の色を見せるやうになつた。もう冬である。

「寒くなつてから火鉢の掃除する奴があるか。氣のきかん者ばかり居る。」と或朝、父の小言が、一家中に響き渡つた。

がたんくと、戸、障子、欄間の張紙が動く。縁先の植込みに、淋しい風の音が、水でも打ちあけるやうに、突然聞えて突然に断える。學校へ行く時、母上が襟巻をなさいとて、箆筒の曳出しを引開けた。冷えた廣い座敷の空気に、樟腦の匂が身に浸渡るやうに匂つた。けれども午過には日の

光が暖く、私は乳母や母上と共に縁側の日向に出て見た時、狐捜しの大騒ぎのあつた時分とは、庭の様子が別世界のやうに變つて居るのをば、不思議な程に心付いた。梅の樹、碧梧の梢が枝ばかりになり、芙蓉や萩や雞頭や、秋草の茂りはすつかり枯れ萎れてしまつたので、庭中はバツと明る日が一ぱいに當つて居て、嘗て、小蛇蝨けらを焼殺した埋井戸のあたりまで、又恐しい崖下の眞黒な杉の木立の頂きまでが、枯れた梢の間から見通される。崖の下り口に立つ松の間の、楓は、その紅葉が今では汚い枯葉になつて、紛々として飛び散る。縁先の敷石の上に置いた盆栽の相には一二枚の葉が血のやうに紅葉したまゝ、残つて居た。父が書齋の九窓外に、八手の葉は墨より黒く、玉の様な其の花は蒼白く輝き、南天の實のまだ青い手火鉢のほとりに蕪鷺の笛啼が絶間なく聞えて屋根、軒、窓、庇、庭一面に

雀の囀りはかしましい程である。

私は初冬の庭をば、悲しいとも、淋しいとも思はなかつた。少くとも秋の薄曇りの日よりも恐しいとは思はなかつた。散り敷く落葉を踏み碎き、踏み響かせて馳せ廻るのが、却て愉快であつた。然し、植木屋の安が、例年の通り、家の定紋を染出した印半纏をきて、職人と二人、松と芭蕉の霜よけをしにとやつて来た頃から、間もなく初霜が午過ぎから解け出して、庭へはもう、一足も踏み出されぬやうになつた。

家の飼犬が知らぬ間に何處へか行つてしまつた。犬殺しにやられたのだ

とも云ふし、又、いゝ犬だつたから、人が盗んで連れて云つたのだとも、議論はまち／＼であつた。私は是非とも、新に二度目の飼犬を置くやうに主張したが、父は犬を置くと、さかりの時分、他處の犬までが来て生垣を破り、庭を荒すからとて、其れなり、家中には犬一匹も置かぬ事となつた。尤も私は、その以前から、臺所前の井戸端に、さゝやかな養雞所が出来て毎日學校から歸ると雞に餌をやる事をば、非常に面白く思つて居た處から其の上にもと、無理な駄々を捏る必要もなかつたのである。如何に幸福な平和な冬籠の時節であつたらう。氣味悪い狐の事は、下女はじめ一家中の空想から消去つて、夜晩く行く人の足音に、消魂しく吠え出す飼犬の聲もなく、木枯の風が庭の大樹をゆるする響に、傳通院の鐘の音はかすれて遠く聞える。しめやかなランプの光の下に、私は母と乳母とを相手に、暖い炬

燧にあたりながら繪草紙錦繪を繰りひろげて遊ぶ。父は出入りの下役、淀井の老人を相手に奥の廣間、引廻す六枚屏風の陰でパチリ／＼碁を打つ。折々は手を叩いて、銚子のつけやうが悪いと怒鳴る。母親は下女まかせには出来ないとして、寒い夜を臺所へと立つて行かれる。自分は幼心に父の無情を憎く思つた。

年の暮が近いて、崖下の貧民窟で、提灯の骨けすりをして居た御維新前のお籠同心が、首をくつた。遠からぬ安藤坂上の質屋へ五人連の強盗が這入つて、十六になる娘を殺して行つた。傳通院地内の末寺へ盜棒が放火をした。水戸様時分に繁昌した富坂上の何とか云ふ料理屋が、いよく身代限りをした。こんな事をば、出入の按摩の久齋だの、魚屋の吉だの、鳶の清五郎だのが、臺所へ来ては交る／＼話をして行つたが、然し、私には

殆ど何等の感想をも與へない。私は唯だ來春、正月でなければ遊びに來ない、父が役所の小使勘三郎の爺やと、九紋龍の二枚半へうなりを付けて上げたいものだ。お正月に風が吹けばよいと、そんな事ばかり思つて居た。けれども、出入りの八百屋の御用聞き春公と、家の仲働 お玉と云ふのが何時か知ら密通して居て、或夜、衣類を背負ひ、男女手を取つて、裏門の板扉を越して馳落ちしやうとした處を、書生の田崎が見付けて取押へたので、お玉は住吉町の親元へ歸されると云ふ大騒ぎだけは、何の事か解らずなりに、然し私は大變な事だと感じた。お玉が泣きながら、白髪の母親に手を引かれ、裏門をくゞつて行く後姿は、何となく私の目にも哀れであつた。此れ以來、私には何だか田崎と云ふ書生が、恐いやうな、憎いやうな氣がして、あれはお父さんのお氣に入りで、僕等だの、お母さんなどには

悪い事をする奴であるやうに感じられてならなかつた。

正月一ぱい、私は紙鳶を上げてばかり遊び暮した。學校のない日曜日は、殊更に朝早く起出て、冬の日の長からぬ事を恨んだが、二月になつて或る日曜日の朝は、そのかひもなく雪であつた。そして、ついで父親の行かれた事のない勝手口の方に、父の太い皺枯れた聲がする。田崎が何か頻りに饒舌り立てゝ居る。毎朝近所から通つて來る車夫喜助の聲もする。私は乳母が衣服を着換へさせやうとするのも聞かず、人々の聲する方に馳け付けたが、上框に懐手して後向きに立つて居られる母親の姿を見ると、私は何がなしに悲しい、嬉しい氣がして、柔い其の袖にしがみつきながら泣いた。

「泣蟲ッ、朝腹から何んだ。」と父は鋭い叱咤の一聲。然し、母上は懐の片

手を抜いて、静に私の頭を撫で、

「また、狐が出て来ました。宗ちゃんの大好きな雞を喰べてしまったんですつて。恐いちやありませんか。おとなしくなさい。」

雪は紛々として勝手口から吹き込む。人達の下駄の齒についた雪の塊が半ば解けて、土間の上は早くも泥濘になつて居た。御飯焚のお悦、新しく来た仲働、小間使、私の乳母、一同は、殿様が時ならぬ勝手口にお出での事として戦々恟々として、寒さに顫へながら、臺所の板の間に造り付けたやうに坐つて居た。

父は田崎が揃へて出す足駄をはき、車夫喜助の差翳す唐傘を取り、勝手口の外、井戸端の傍なる雞小屋を巡見にと出掛ける。

「母さん。私も行きたい。」

「風邪引くといけません。およしなさい。」

折から、裏門のくゞりを開けて、「どうも、わりいものが降りやした。」と鳶の頭清五郎がさしこの頭巾、半纏、手甲がけの火事装束で、町内を廻る第一番の雪見舞ひにとやつて来た。

「へえッ、飛んでもねえ。狐がお屋敷の雞をとつたんでげすつて。御維新此方ア、物騒でげすよ。お稻荷様も御扶持放れで、油揚の臭一つかけねえもんだから、お屋敷へ迷込んだげす。譯ア御わせん。手前達でしめつちまひやせう。」

鳶の清五郎は雞小屋の傍まで、私を脊負つて行つて呉れた。今朝方、曉かけて、津々と降り積つた雪の上を忍び寄り、狐は竹垣の下の地を掘つて潜込んだものと見え、雪と砂とを前足で掻亂した狼藉の有様。

竹構の中は殊更に、吹込む雪の上を無慘に飛散る雞の羽ばかりが、一點二點、眞赤な血の滴りさへ認められた。

「御前、譯ア御わせん。雪の上に足痕がついて居やす。足痕をつけて行きやア、篠田の森ア、直ぐと空止めまさあ。去年中から、へーえ、お庭の崖に居たんでげすか。」

清五郎の云ふ通り、足痕は庭から崖を下り、松の根元で消えて居る事を發見した。父を初め、一同、「しめた」と覺えず勝利の聲を上げる。田崎と車夫喜助が鋤鍬で、雪をかき除けて見ると、去年中あれほど搜索しても分らなかつた狐の穴は、冬も茂る熊笹の陰にありく見えずいて居る。いよいよ狐退治の評議が開かれる。

喜助は、唐辛でえぶせば、奴さん、我慢が出来ずにこんく云ひながら

出て来る。出て来た處を取ツちめるがいと云ふ。田崎は萬一逃げられると残念だから、穴の口元へ鼠か其れでなくば火薬を仕掛ける。ところが、鳶の清五郎が、組んで居た腕を解いて、傾げる首と共に、難題を持出した。「全體、狐ッて奴は、穴一つちやねえ。きつと何處にか抜穴を付けとくつて云ふせ。一方口ばかり堅めたつて、知らねえ中に、裏口からおさらばをきめられちや、いゝ面の皮だ。」

一同、成程と思案に暮れたが、此の裏穴を捜出す事は、大雪の今、差當り、非常に困難なばかりか寧ろ出来ない相談である。一同は遂にがたく寒さに顔出す程、長評定を凝した結果、止むを得ないから、見付出した一方口を硫黄でえぶし、田崎は家にある鐵砲を準備し、父は大弓に矢をつがひ、喜助は天秤棒、鳶の清五郎は鳶口、折から、少く後れて、例年の雪掻

きにと、植木屋の安が来たので、此れ亦、天秤棒に加はる事となつた。
 父は洋服に着換る爲め、一先屋敷へ這入る。田崎は傳通院前の生薬屋に
 硫黄と烟硝を買ひに行く。残りのものは一升樽を茶碗飲みにして、準備の
 出来るのを待つて居る騒ぎ。兎や角と暇取つて、いよ／＼穴の口元をえぶ
 し出したのは、もう午近くなつた頃である。私は一同に加つて狐退治の現
 状を目撃したいと云つたけれど、嚴しく母上に止められて、母上と乳母の
 三人で、例の如く座敷の炬燵に繪草紙を繰擲げはしたものの、立つたり坐
 つたり、氣も氣では無い。鐵砲の響と云へば、十二時の「どん」しか聞い
 た事がない。あれは遠い丸の内、それでも天氣のいゝ時には吃驚りするほ
 ど座敷の障子を揺る事さへある、されば、すぐ崖下に狐を打殺す銃聲は、
 如何に強く耳を貫くであらう。家中の女共も同じ事、誰れか狐に喰ひつか

れはしまいか。お狐様は家の中まで荒れ込んで來はしまいか。お念佛を稱
 へるもの、お札を頂くものさへあつたが、母上は出入のもの一同に、振舞
 酒の用意をするやうにと、こま／＼云付けて居られた。
 私は時々縁側に出て見たが、崖下には一人一人も居ないやうに寂として居
 て、それかと思ふ烟も見えず、近くの植込の間から、積つた雪の滑り落ち
 る響が、淋し氣に聞えるばかり。暗澹たる空は低く垂れ、立木の梢は雲の
 やうに霞み渡つて居ながら、紛紛として降る雪、満々として積る雪に、庭
 一面は朦朧として薄暮よりも明かつた。母と二人、午飯を済まして、一時
 も過ぎ、少しく待ちあぐんで、心疲れのして來た時、何とも云へぬ悲惨な
 叫聲。どつと一度に、大勢の人の凱歌を上げる聲。家中の者皆障子を蹴倒
 して縁側へ駆け出た。後で聞けば、硫黄でえぶし立てられた獸物の、恐る

恐る穴の口元へ首を出した處をば、清五郎が待構へて一打ちに打下す。鵞口、それが紛れ當りに運好くも、狐の眉間へと、ぐつさり突刺つて、奴さん、ころりと文句も云はず、悲鳴と共にくたばつて仕舞つたとの事。大弓を提げた偉大の父を真先に、田崎と喜助が二人して、倒に獲物を吊した天秤棒をかつぎ、其の後に清五郎と安が引續き、積つた雪を踏みしだき、隊伍正しく崖の上に立現はれた時には、私はふいと、繪本で見る忠臣蔵の行列を思出し、あゝ勇しいと感じた。然し真近く進んで、書生の田崎が、例の漢語交りで、「坊ちやん此の通りです。天網恢々疎にして漏らさず。」と差付ける狐を見ると、鵞口で打割られた頭蓋と、喰ひしばつた牙の間から、どろどろした生血の雪に滴る有様。私は覺えず柔い母親の小袖のかけにその顔を蔽ひかくした。

さて、午過ぎからは、家中大酒盛をやる事になつたが、生憎とこの大雪で、魚屋は河岸の仕出しが出来なかつたと云ふ處から、父は家の雞を殺して、出入の者共を饗應する事にした。一同喜び、狐の忍入つた雞小屋から二羽の鶏を捕へて潰した。黒いのと、白い斑ある牝鶏二羽。それは去年の秋の頃、綿のやうな黄金色なす羽に包まれ、ビョク／＼鳴いてゐたのをば、私は毎日學校の行歸り、餌を投げ菜をやりして可愛がつたが、今では立派に肥つた母鶏になつたのを。あゝ、二羽が二羽とも、同じ一聲の悲鳴と共に、田崎の手に首をねぢられ、喜助の手に毛を挫られ、安の手に腹を割かれ、腸を引出られて了つた。夜更けまで、舌なめすりしながら、酒を飲んで居る人達の眞赤な顔が、私には繪草紙で見る鬼の通りに見えた。眠りながら、その夜私は思つた。あの人達はとうして、あんなに、狐を

憎にくんだのであらう。鶏とりを殺ころしたとて、狐きつねを殺ころした人々は、狐きつねを殺ころしたとて、更さらに又また、鶏にはとりを二羽はまで殺ころしたのだ。

あゝ、ツルゲネーフは、蛇へびと蛙かえるの争あそひから、幼こ心に神かみの慈悲じひ心を疑うたつた。私わたしはすこしく書物しよぶつを讀よむやうになるが早はやいか、世よに裁判さいはんと云いひ、懲罰ちやうばつと云いふものゝ意味いみを疑うたふやうになつたのも、或あるひは遠とほい昔むかしの狐退治きつねたいぢ。其等それらの記念きねんが知しらずぐゝの原因げんかんになつて居ゐたのかも知しれない。

曇 天

衰殘、憔悴、零落、失敗。これほど味ひ深く、自分の心を打つものはない。暴風に吹きおとされた泥の上の花びらは、朝日の光に咲きかける蕾の色よりも、どれほど美しく見えるであらう。捨てられた時、別れた後、自分初めて戀の味ひを知つた。平家物語は日本に二ツと見られぬ不朽のエポッセである。もしそれ、光榮ある、ナポレオンの帝政が、今日までもついて居たならば、自分はおくまで烈しく、フランスを愛し得たであらうか。壯麗なるコンコルトの眺めよ。それは戦敗の黒幕に蔽はれ、手向の花束にかざられたストラスブルグの石像あるがために、一層偉大に、一層幽

婉になつたではないか。凱旋門をばあれほど高く、あれほど大きく、打仰
 がうとするには、是非ともその下で、亂入した獨逸人が、シエツペルトの
 進行曲を奏したと云ふ、屈辱の歴史を思返す必要がある。後世のギリシヤ
 人は太古祖先の繁榮を一層強く引立たせる目的で、わざ／＼土耳其人に虐
 げられて居たのではあるまいか、自分は日本よりも支那を愛する。暗鬱悲
 慘なるが故にロシアを敬ふ。イギリス人を憎む。エジプト人をゆかしく思
 ふ。官立の大學を卒業し、文官試験に合格し、局長や知事になつた友達は
 自分の訪ねやうとする人ではない。華族女學校を卒業して親の手から夫の
 手に移され、兒を産んで愛國婦人會の名譽會員になつてゐる女は、自分の
 振向かうとする人ではない。自分は汚名を世に謳はれた不義の娘と腕を組
 みたい。嫌はれた上旬に無理心中して、生残つた男と酒が飲みたい。晴れ

た春の日の、日比谷公園に行くなけれ。雨の降る日に泥濘の本所を散歩し
 やう。鳥うたひ草薫る春や夏が、田園に何の趣きを添へやうか。曇つた秋
 の小徑の夕暮に、踏みしく落葉の音をきいて、はじめて遠く、都市を離れ
 た心になる……
 自分は何となく氣抜けした心持で、晝過ぎに訪問した友達の家を出た。
 友達は何となく戀してゐた女をば、兩親の反對やら、境遇の不便やら、さ
 ま／＼な浮世の障害を切抜けて、見初めて後の幾年目、やツとの事で新し
 い家庭を根岸に造つたのだ。その喜ばしい報道に接したのは、自分が外國
 へ行つて丁度二年目、日本では梅が咲く、然しかの國ではまだ雪が解けな
 い春の事で、自分は遠からず故郷へ歸つたならば、何はさて置き、わが出
 發の昔には、不幸な運命に泣いてのみ居た若い男、若い女、今では幸福な

夫と妻、その美しい姿を見て、心のかぎり喜びたいと思つてゐた。しかし、自分はどうした譯であらう。唯だ何と云ふ事もなくがつかりしたのだ。一種の悲愁と、一種の絶望を覺えたのだ。あゝ、どうしたわけであらう。どうしたわけであらう。

毎日の曇天。十一月の半過ぎ。寂とした根岸の里。濕つた道の生垣つき。自分はひとり、時雨を恐れる蝙蝠傘を杖にして、落葉の多い車坂を上つた。巴里の墓地に立つ悲しいシープリーの樹を見るやうな眞黒な杉の立木に、木陰の空氣は殊更に濕つて、冷かに人の肌をさす。

淋しくも靜かに立ち連つた石燈籠の列を横に見て、自分は見晴しの方へと、灰色に砂の乾いた往來の導くまゝに曲つて行つた。危い空模様のこととて人通りは殆どない。處々の休茶屋の、雨ざらしにされた床几の上には、

枯葉にまぢつて鳥の糞が落ちてゐる。幾匹と知れぬ鴉の群ればかり、靈廟の方から山王臺まで、さしにも広い上野の森中せましと騒ぎ立て、居る。その厭はしい鳴聲は、日の暮れが俄かに近いて來たやうに、何と云ふ譯もなく人の心を不安ならしめる。自分は黒い杉の木立の間をば、脚絆に手甲

がけ、編笠かぶつた女の、四人五人、高帯と熊手を動し、落葉枯枝をかきよせてゐるのをば、時々は不思議さうに打眺めながら、摺鉢山の麓を鳥居の方へと急いだ。搔寄せられた落葉は道の曲角に空地も同様に捨てられた墓場の隅、又は赤土の崩れから、杉の根が瘦せひからびた老人の手足のやうに、氣味わるく這ひ出してゐる往來際に、うづ高く積み上げられ、番する人もなく、燃るがまゝに燃されてゐる。しかし閃き出る美しい燐はなく、眞青な烟ばかりが惱みがちに湧出し、地濕りの強い匂ひを漲らせて、